

専門	必修	応用化学・生物実験Ⅱ	0013	履修単位	6	6 6	岩波 俊 介 宇 津野 国 治 櫻 村 奈 生 裕之 清水 祐一 橋本 久穂 平野 博人 古崎 毅	
専門	必修	創造工学Ⅲ	0014	履修単位	2	2 2	宇津野 国治 櫻村 奈生	
専門	必修	分析化学Ⅲ	0015	履修単位	1	2	奥田 弥 生	
専門	選択	学外実習	0026	学修単位	1		平野 博 人	
専門	選択	ビジネスⅠ	0027	学修単位	2		須田 孝 徳	
専門	必修	無機化学Ⅲ	0028	学修単位	2		古崎 毅	
専門	必修	有機化学Ⅲ	0029	学修単位	2		橋本 久 穂	
専門	必修	物理化学Ⅱ	0030	学修単位	2		甲野 裕 之	
専門	必修	生化学Ⅱ	0031	学修単位	2		藤田 彩 華	
専門	必修	分子生物学	0032	学修単位	2		宇津野 国治	
専門	必修	化学工学Ⅱ	0033	学修単位	2		佐藤 森	
専門	必修	情報処理Ⅰ	0034	履修単位	1		佐藤 森	
専門	必修	機能材料Ⅰ	0035	学修単位	2		橋本 久 穂	
専門	必修	機能材料実験	0036	履修単位	6		櫻村 奈 生 甲 野 裕 之 橋本 久穂 藤田 彩華 古崎 毅	
専門	必修	応用微生物学	0037	学修単位	2		岩波 俊 介	
専門	必修	食品・生物化学実験	0038	履修単位	6		岩波 俊 介 宇 津野 国 治 櫻 村 奈 生 佐藤 森 清 水 祐 一 平 野 博 人	

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	創造工学Ⅱ
科目基礎情報						
科目番号	0016		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	履修単位: 2		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	2		
開設期	通年		週時間数	2		
教科書/教材	各系作成のプリントなど					
担当教員	古崎 毅					
到達目標						
1)自身の専門系を中心とした基礎的な能力を身につける. 2)工学を幅広く捉え、工学の幅広い知識を身につける. 3)技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解する. 4)グループで議論して立案した課題の解決方法を、聞き手にわかりやすく伝わる様に発表できる. 5)グループで合意形成した方法を実践できる. 6)収集した情報の取捨選択・整理・分類などにより、活用すべき情報を選択できる. 7)当事者意識をもってチームでの作業・研究を進めることができる. 8)自らの現状を認識し、将来のありたい姿に向かっていくために現状に必要な学習や活動を考えることができる.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)	
評価項目1	自身の専門系を中心とした基礎的な能力を身につけ、活用できる。		自身の専門系を中心とした基礎的な能力を身につける。		自身の専門系を中心とした基礎的な能力を身につけられない。	
評価項目2	工学を幅広く捉え、工学の幅広い知識を身につける。		工学を幅広く捉え、工学の幅広い知識を身につける。		工学を幅広く捉えられず、工学の幅広い知識を身につけられない。	
評価項目3	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解できる。		技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解できる。		技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解できない。	
評価項目4	グループで議論して立案した課題の解決方法を、聞き手にわかりやすく伝わる様に発表できる。		グループで議論して立案した課題の解決方法を、聞き手にわかりやすく伝わる様に発表できる。		グループで議論して立案した課題の解決方法を、聞き手にわかりやすく伝わる様に発表できない。	
評価項目5	グループで合意形成した方法を実践できる。		グループで合意形成した方法を実践できる。		グループで合意形成した方法を実践できない。	
評価項目6	収集した情報の取捨選択・整理・分類などにより、活用すべき情報を選択し、新たな案の創出に利用できる。		収集した情報の取捨選択・整理・分類などにより、活用すべき情報を選択できる。		収集した情報の取捨選択・整理・分類などにより、活用すべき情報を選択できない。	
評価項目7	当事者意識をもってチームでの作業・研究を進めることができる。		当事者意識をもってチームでの作業・研究を進めることができる。		当事者意識をもってチームでの作業・研究を進めることができない。	
評価項目8	自らの現状を認識し、将来のありたい姿に向かっていくために現状に必要な学習や活動を考えることができる。		自らの現状を認識し、将来のありたい姿に向かっていくために現状に必要な学習や活動を考えることができる。		自らの現状を認識し、将来のありたい姿に向かっていくために現状に必要な学習や活動を考えることができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	自身の専門分野における演習や実験に加え、自身に関連する可能性のある他専門分野に関する演習や実験を通して、幅広く工学的基礎知識・技術を身に付ける。 また、専門分野ごとに異なる視点・考え方を理解でき、幅広い観点において工学を捉えられるようになることを目的に、各専門系の枠組みを超えた班編成においてグループワークを行う。 上記に加えて、現代社会に必要な情報リテラシー、技術者に必要な倫理観、自身のキャリア形成に必要な能力や態度を身に付けることを目的とする。					
授業の進め方・方法	授業は、基本的に実験や演習などを中心に行う。 グループ単位での演習や実験も行われる。 課題の提出などに当たっては、Blackboardなどが使用されることもある。 また、講義室の変更などに関する連絡はOffice365のメールにより行われる。					
注意点	・BlackboardやOffice365のメールを、確実に利用できる様にしておくこと。 ・授業時間以外も活用して課題作製や調査研究などに取り組むことが必要となる場合もあります。 ・グループ学習では、自分の役割を見つけ、グループ活動に積極的に参加すること。 ・学習にあたっては、自己のキャリアについて常に意識し、将来の進路選択を行う際の参考にすること。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	前期内容ガイダンス, キャリア教育 (キャリアデザインシートの作成+業界説明)		自らの現状を認識し、将来の目標に対して現状に必要な学習や活動を考えることができる。	
		2週	Arduino製作実験を通して学ぶIoT (1) -次世代社会におけるIoTとマイコンボードの役割-		次世代社会での工学におけるIoTの重要性および、通信技術やマイコンの役割を理解できる。	
		3週	Arduino製作実験を通して学ぶIoT (2) -Arduinoの仕組み-		Arduinoプログラムの基礎となるアナログ・デジタル入出力、変数、制御文、関数などについて理解できる。	
		4週	Arduino製作実験を通して学ぶIoT (3) -各種入力センサ制御-		超音波センサ、ジャイロセンサなどの入力センサの制御について理解できる。	
		5週	Arduino製作実験を通して学ぶIoT (4) -各種出力部品制御-		モーター、LEDなどの出力部品の制御について理解できる。	
		6週	Arduino製作実験を通して学ぶIoT (5) -各専門系におけるIoT活用-		それぞれの専門系において良く用いられるセンサ・部品を使った回路製作および、IoTの有効的な活用方法について考えることができる。	
		7週	自専門系内容 (1) 質量測定①		質量測定に必要な機器を正しく使用できる。	
		8週	自専門系内容 (2) 質量測定②		質量測定に必要な機器を正しく使用できる。	

後期	2ndQ	9週	自専門系内容（３）液体移動・体積計①	液量測定に必要な器具を正しく取り扱うことができる。	
		10週	自系専門内容（４）液体移動・体積計②	液量測定に必要な器具を正しく取り扱うことができる。	
		11週	自系専門内容（５）溶液の濃度	溶液の調製，一般的な溶液の希釈ができる。	
		12週	自系専門内容（６）比重測定①	浮きばかりを使用して溶液の密度を測定できる。	
		13週	自系専門内容（７）比重測定②	浮きばかりを使用して溶液の密度を測定できる。	
		14週	自系専門内容（８）レポートの書き方	レポート・ノートの書き方を理解し，適切な記述できる。	
		15週	情報セキュリティ教育	インターネットを利用する上での様々な脅威を認識できる。	
		16週			
	3rdQ	3rdQ	1週	後期内容ガイダンス，キャリア教育（職業人インタビュー）	様々な職業人に対しインタビューし，その内容を簡潔にまとめ発表できる。
			2週	企業見学ツアー	地域に根差す企業を見学し，地域産業の特徴について理解する。
			3週	企業見学ツアー	地域に根差す企業を見学し，地域産業の特徴について理解する。
			4週	技術者倫理教育	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果を理解できる。
			5週	都市・環境系専門内容（１）	他系専門内容についての知識を身に付けることができる。
			6週	都市・環境系専門内容（２）	他系専門内容についての知識を身に付けることができる。
			7週	都市・環境系専門内容（３）	他系専門内容についての知識を身に付けることができる。
			8週	都市・環境系専門内容（４）	他系専門内容についての知識を身に付けることができる。
4thQ		9週	キャリアシンポジウム	高専出身の企業人の話を聞き，企業・働き方の多様性について理解できる。	
		10週	グループワーク演習 -自身のタイプ分け-	自己分析手法について理解できる。 グループ討議に積極的に参加できる。	
		11週	グループワーク演習 -合意形成演習-	グループ討議における合意形成手法を理解し，実践できる。 課題に対するグループ討議に，自ら積極的に参加することができる。	
		12週	グループワーク演習 -協働作業演習-	主体性をもってグループでの作業に参加できる。 作業の中において情報を収集・整理・分析し，活用していくことができる。	
		13週	グループワーク演習 -協働作業演習-	主体性をもってグループでの作業に参加できる。 作業の中において情報を収集・整理・分析し，活用していくことができる。	
		14週	グループワーク演習 -SCM演習-	主体性をもってグループでの作業に参加できる。 経営工学的な概念について理解できる。	
		15週	グループワーク演習 -プレゼンテーション演習-	聞き手に理解してもらうことを意識して，発表や質疑応答ができる。 相手の発表内容を理解し，質問ができる。	
		16週			

評価割合				
	課題・レポート	発表	取組み	合計
総合評価割合	60	20	20	100
基礎的能力	0	10	10	20
専門的能力	40	0	0	40
分野横断的能力	20	10	10	40

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	分析化学Ⅰ	
科目基礎情報							
科目番号	0017		科目区分		専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		2		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材	澁谷 康彦 他共著「分析化学の学び方」 (三共出版)						
担当教員	櫻村 奈生						
到達目標							
基本的な化学分析がどのような反応に基づいているのかが理解できる。溶液中の様々な化学種の濃度が反応の前後でどのように変化するかを予測できる。既知の分析法を一部変更して新規な試料に応用する方法を理解し、実際の分析で実践できるための基礎的な知識を身につける。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
到達目標1	化学量論に基づき正しく複雑な反応の反応式を書くことができる。		化学量論に基づき正しく単純な反応の反応式を書くことができる。		化学量論に基づき正しく単純な反応の反応式を書くことができない。		
到達目標2	正しく複雑な溶液の濃度を計算できる。		基本的な溶液の濃度を計算できる。		正しく濃度計算ができない。		
到達目標3	複雑な反応式に対応する平衡定数の式を書くことができる。		基本的な反応式に対応する平衡定数の式を書くことができる。		基本的な反応式に対応する平衡定数の式を書くことができない。		
到達目標4	Brønsted-Lowry の定義に基づいて多くの物質を酸、塩基、塩およびそれ以外の物質に分類ができる。		Brønsted-Lowry の定義に基づいて代表的な物質を酸、塩基、塩およびそれ以外の物質に分類ができる。		Brønsted-Lowry の定義に基づいて物質を酸、塩基、塩およびそれ以外の物質に分類ができない。		
到達目標5	複雑な溶液の電荷均衡式、質量均衡式を書くことができる。		単純な溶液の電荷均衡式、質量均衡式を書くことができる。		単純な溶液の電荷均衡式、質量均衡式を書くことができない。		
到達目標6	混合物といった複雑な酸溶液のpHを計算できる。		酸や塩基などの単純な溶液pHを計算できる。		酸や塩基などの単純な溶液のpHを計算できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	重量分析、容量分析あるいは電気化学的分析等、種々の分析法の基盤になっている酸・塩基について、溶液内化学種の濃度を計算で求めるためのイオン平衡の知識を教授し、計算法を解説する。						
授業の進め方・方法	化学Ⅰで習得した基礎知識の理解が前提となるのでよく復習しておくこと。ル・シャトリエの原理の理解は特に重要である。概ね教科書に沿って進行するのでシラバスを参考にして予習すること。ノート、筆記具、電卓を準備すること。						
注意点	学習目標に関する2回の試験および課題を評価の観点に基づいて採点し総合的に達成度を判断する。定期試験45%、中間試験35%、課題提出20%の割合で評価する。合格点は60点である。成績評価が60点に満たないものについては再試験を行うことがあるが、定期試験の実施日に手書きの講義ノート、および期日までに回想カードを提出しなかった学生はその対象とはならない。再試験の得点は上記の定期試験と中間試験の占める割合 (80%) までとし、再試験を受けた者の成績評価は60点を超えないものとする。						
授業計画							
		週	授業内容			週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	ガイダンス 序論 分析化学の役割 分析化学の分類と目的 付録A-3 有効数字			有効数字を考慮して計算できる。	
		2週	第1章 1-1 化合物の名称と反応式の書き方			代表的なイオン・化合物の化学式書くことができる。	
		3週	第1章 1-1 化合物の名称と反応式の書き方②			化学量論に基づき、正しく反応式を書くことができる。	
		4週	1-2 溶液の濃度			正しく濃度計算ができる。	
		5週	2章 2-2 化学反応と化学平衡			物質収支と電荷均衡の式を書くことができる。	
		6週	2-1 化学方程式			反応式に対応する質量作用能法則(平衡定数の式)を書くことができる。	
		7週	グループワーク				
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	3章 3-1 水の電離、水素イオン濃度と水素イオン指数			水素イオン濃度とpHを相互変換できる。	
		10週	3-2 酸と塩基			Brønsted-Lowry の定義に基づいて物質を酸、塩基、塩およびそれ以外の物質に分類ができる。	
		11週	3-3 強酸と強塩基の水溶液			希薄強酸溶液のpHを計算できる。	
		12週	3-4 弱酸と弱塩基の水溶液 3-4-1 一塩基酸および一酸塩基の水素イオン濃度とpH			弱酸溶液のpHを計算できる。	
		13週	3-4-2 共役酸塩基対と緩衝溶液			緩衝溶液のpHを計算できる。	
		14週	3-6 混合溶液			種々の酸・塩基混合溶液のpHを計算できる。	
		15週	グループワーク				
		16週	定期試験				
評価割合							
	中間試験		定期試験		課題		合計
総合評価割合	35		45		20		100
基礎的能力	35		45		20		100

專門的能力	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0

	小テスト	定期試験	課題	合計
総合評価割合	40	40	20	100
基礎的能力	40	40	20	100
専門的能力	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	無機化学Ⅰ	
科目基礎情報							
科目番号	0019		科目区分		専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		履修単位: 1		
開設学科	創造工学科（応用化学・生物系共通科目）		対象学年		2		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	教科書：古崎毅・奥田弥生・川村静夫共著「苫小牧工業高等専門学校物質工学科の学生のための無機化学」／参考図書：サイエンスビュー「化学総合資料」実教出版, R.B.Heslop著, 斎藤喜彦訳「無機化学 上・下」東京化学同人						
担当教員	藤田 彩華						
到達目標							
1. 有効数字を考慮した計算ができる。 2. 元素の定義、原子の構成要素、同位体、放射性同位体、原子の構造、多くの元素には同位体が存在することを説明することができる。 3. 電子のエネルギー状態は4つの量子数によって支配されていること、電子が電子軌道に収納される際には原則としてPauliの排他律、Hund則及びAufbauの原理に基づいて配置されていること及び電子軌道は定まった形状を有していることを説明できる。 4. 電子配列に基づき、元素の物理的・化学的性質には周期性があることを説明できる。 5. イオン結合・共有結合の特徴、電気陰性度を説明することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
1. 有効数字を考慮した計算ができる。	有効数字を考慮した計算ができ、演習問題において自ら有効数字を考慮し答えを導くことができる。		有効数字を考慮した基礎的な計算ができる。		有効数字を考慮した基礎的な計算ができない。		
2. 元素の定義、原子の構成要素、同位体、放射性同位体、原子の構造、多くの元素には同位体が存在することを説明することができる。	元素の定義、原子の構成要素、同位体、放射性同位体、原子の構造、多くの元素には同位体が存在することを説明することができる。		元素の定義、原子の構成要素、同位体、放射性同位体、原子の構造、多くの元素には同位体が存在することの内、半数を説明することができる。		元素の定義、原子の構成要素、同位体、放射性同位体、原子の構造、多くの元素には同位体が存在することを説明できない。		
3. 電子のエネルギー状態は4つの量子数によって支配されていること、電子が電子軌道に収納される際には原則としてPauliの排他律、Hund則及びAufbauの原理に基づいて配置されていること及び電子軌道は定まった形状を有していることを説明できる。	電子のエネルギー状態は4つの量子数によって支配されていること、電子が電子軌道に収納される際には原則としてPauliの排他律、Hund則及びAufbauの原理に基づいて配置されていること及び電子軌道は定まった形状を有していることを説明できる。		電子のエネルギー状態は4つの量子数によって支配されていること、電子が電子軌道に収納される際には原則としてPauliの排他律、Hund則及びAufbauの原理に基づいて配置されていること及び電子軌道は定まった形状を有していることの内、半数を説明することができる。		電子のエネルギー状態は4つの量子数によって支配されていること、電子が電子軌道に収納される際には原則としてPauliの排他律、Hund則及びAufbauの原理に基づいて配置されていること及び電子軌道は定まった形状を有していることを説明できない。		
4. 電子配列に基づき、元素の物理的・化学的性質には周期性があることを説明できる。	電子配列に基づき、元素の物理的・化学的性質には周期性があることが説明できる。		元素の物理的・化学的性質には周期性があることの基本的な説明ができる。		元素の物理的・化学的性質には周期性があることの基本的な説明ができない。		
5. イオン結合・共有結合の特徴、電気陰性度を説明することができる。	イオン結合・に基づき、元素の物理的共有結合の特徴、電気陰性度を説明することができる。		イオン結合・共有結合の特徴、電気陰性度の基本的な説明ができる。		イオン結合・共有結合の特徴、電気陰性度の基本的な説明ができない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	・ 元素の定義、原子の電子構造、元素の周期性、化学結合についての基礎的知識を教授する。						
授業の進め方・方法	・ 講義は座学方式で行い、適宜、課題を課すことにより理解を深め、知識定着の状況を点検する。 ・ 学習達成目標を達成できているかどうかを、各章ごとに行う小試験、定期試験及び課題により総合評価する（小試験40%、定期試験40%、課題20%の割合）。合格点は60点である。 ・ 再試験は、学業成績の評価点が40点以上60点未満の者を対象として行うことがあり、試験分(80%分)の再評価をするものとする。再試験を受けた学生の成績評価は60点を超えないものとする。						
注意点	・ 化学Ⅰ、Ⅱで習得した知識が基礎となるので、関連科目についてはよく復習し受講すること。 ・ 実際に学習した知識を身に付けるためには、単に講義を聴くだけでなく自学自習を行い、繰り返し演習問題に取り組む（復習に力を入れる）こと。 ・ 講義時にはノート、筆記用具、電卓、定規を持参すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1章 数と量、単位 2章 元素について(1) ～元素の定義、物質の構成～		有効数字を考慮した計算ができる。 元素の定義、物質の構成（純物質、混合物、単体、化合物）について説明することができる。		
		2週	2章 元素について(2) ～原子構造の解明と歴史的背景、原子の構成要素（原子核、電子、陽子、中性子）、原子番号～		原子の構造解明の歴史的背景を説明することができる。 原子の構成要素について図示して説明することができる。		
		3週	2章 元素について(3) ～同位体、放射性同位体、放射線、放射性同位体元素の崩壊と半減期～		同位体、放射性同位体、放射線について説明できる。 放射性元素の崩壊定数・半減期の算出ができる。		
		4週	2章 元素について(4) ～原子量～		原子の質量から原子の質量欠損が算出できる。		
		5週	3章 原子の電子構造(1) ～水素原子のスペクトル、ラザフォードの原子モデルの量子論的解釈～		電子軌道の不連続性、ラザフォードの原子モデルについて説明できる。		
		6週	3章 原子の電子構造(2) ～ボーアの水素原子モデルとボーア半径、基底状態における水素原子の電子エネルギー～		ボーアの原子モデルについて説明でき、ボーア半径および基底状態における水素原子の電子エネルギーを算出することができる。		
		7週	3章 原子の電子構造(3) ～Rydberg定数の解釈、4つの量子数および電子配置の表示法、Pauliの排他律～		ボーアの原子モデルからRydberg定数を解釈できる。 4つの量子数について説明できる。		

		8週	3章 原子の電子構造(4) ～電子軌道, Aufbauの原理, Hundの規則, Aufbauの原理の例外～	各種の電子軌道s軌道, p軌道, d軌道の形状を図を書いて説明できる。Aufbauの原理とHundの規則から電子配置を表示できる。また, 例外としてAufbauの原理に基づかない電子配置をとる元素があり, その理由を説明できる。
	4thQ	9週	3章 原子の電子構造(5) ～有効核電荷および遮蔽定数の定義～	有効核電荷および遮蔽定数について説明できる。
		10週	3章 原子の電子構造(6) ～Salterによる遮蔽定数の計算～ 4章 元素の周期性(1) ～電子配列の周期性と周期表～	Salterの方法による遮蔽定数および有効核電荷を算出できる。 電子配列に基づいた元素の周期性を説明できる。
		11週	4章 元素の周期性(2) ～典型元素と遷移元素, イオン化エネルギーの定義と求め方～	典型元素と遷移元素の電子構造の違いを説明できる。 イオン化エネルギーの定義を説明でき算出することができる。
		12週	4章 元素の周期性(3) ～電子親和力の定義～ 5章 化学結合(1) ～イオン結晶の定義～	電子親和力, イオン結合の定義を説明することができる。
		13週	5章 化学結合(2) ～イオン結晶の格子エネルギーの定義と求め方～	イオン結晶の格子エネルギーを算出できる。
		14週	5章 化学結合(3) ～Born-Harberサイクルを用いた電子親和力の求め方, イオン半径の定義～	Born-Haberサイクルを用いて電子親和力を算出できる。 Paulingの仮定からイオン半径が算出できる。
		15週	5章 化学結合(4) ～共有結合の定義, Paulingによる電気陰性度の求め方～	共有結合および電気陰性度の定義を説明でき, Paulingによる電気陰性度を算出できる。
		16週	定期試験	

評価割合

	小試験	定期試験	課題	合計
総合評価割合	40	40	20	100
基礎的能力	30	30	15	75
専門的能力	10	10	5	25

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	有機化学 I	
科目基礎情報							
科目番号	0020		科目区分		専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		2		
開設期	後期		週時間数		2		
教科書/教材	J. McMurry著, 児玉 三明 他訳「マクマリー有機化学概説 第7版」東京化学同人／「HGS分子構造模型 有機化学学生用セット」丸善出版						
担当教員	樫村 奈生						
到達目標							
アルカン, アルケン, アルキンの化学構造を説明できる。簡単な化合物の官能基を指摘し, IUPAC命名法に関する問題を解くことができる。アルケン・芳香族化合物の代表的な反応を例示できる。共鳴論を用いて, 共役ジエンへの1,4-付加, ベンゼンの安定性を説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
到達目標1	複雑なアルカン, アルケン, アルキンの化学構造を説明できる。		簡単なアルカン, アルケン, アルキンの化学構造を説明できる。		アルカン, アルケン, アルキンの化学構造を説明できない。		
到達目標2	複雑な化合物の官能基を指摘し, IUPAC命名法に関する問題を解くことができる。		簡単な化合物の官能基を指摘し, IUPAC命名法に関する問題を解くことができる。		簡単な化合物の官能基を指摘し, IUPAC命名法に関する問題を解くことができない。		
到達目標3	アルケン・芳香族化合物の代表的な反応を例示し, 電子論を用いて反応機構を説明できる。		アルケン・芳香族化合物の代表的な反応を例示できる。		アルケン・芳香族化合物の代表的な反応を例示できない。		
到達目標4	共鳴論を用いて, 共役ジエンへの1,4-付加, ベンゼンの安定性および芳香族化合物の配向性を説明できる。		共鳴論を用いて, 共役ジエンへの1,4-付加, ベンゼンの安定性を説明できる。		共鳴論を用いて, 共役ジエンへの1,4-付加, ベンゼンの安定性を説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	有機化学を学習する上で基礎となる有機化合物の命名法, 立体構造および反応に関する基礎的な知識, アルケンおよび芳香族化合物の代表的な反応に関する基礎的な知識を教授する。教科書・ノート・分子模型を持参すること。						
授業の進め方・方法	原子の構造, 化学結合に関する基礎的な知識の理解を前提とする。講義中に用いた化合物を分子模型で作製し, 立体構造のイメージトレーニングに励むこと。						
注意点	課題・試験において授業項目に対する達成目標に関する問題を出題し, 達成度を総合的に評価する (中間試験35%, 定期試験45%, 課題20%)。合格点は60点である。成績評価が60点未満の場合は再試験を実施することがあるが, 定期試験の実施日に手書きの講義ノート, および期日までに回想カードを提出しなかった学生はその対象とはならない。再試験の得点は上記の定期試験と中間試験の占める割合 (80%) までとし, 再試験を受けた者の成績評価は60点を超えないものとする。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	1.有機化合物の構造と結合 (1章) 1-1共有結合		有機化学の定義を想起できる。共有結合と極性共有結合について説明できる。		
		2週	1-2エタン, エテン, エチンの構造		混成軌道からメタン, エタン, エチレン, エチンの立体構造を説明できる。		
		3週	2.アルカン (2章) 2-1IUPAC命名法と官能基		アルカンを命名し, 構造式を書くことができる。		
		4週	2-2アルカンの性質 2-3シクロアルカンの立体構造		種々の官能基を持つ化合物を例示しIUPAC命名法で命名できる。シクロヘキサンの立体構造を説明できる		
		5週	3.アルケンI (3章) 3-1シス-トランス異性体		シス-トランス異性体を認識し, 命名できる。		
		6週	3-2IUPAC命名法と官能基		簡単なアルケンを命名できる。		
		7週	3-3エテンへのHClの付加反応		エテンへのHClの付加反応の反応機構を説明できる。		
		8週	4.アルケンII (4章) 4-1アルケンの求電子付加反応		Markovnikov則から, アルケンの求電子付加反応で得られる生成物を予測できる。		
	4thQ	9週	中間試験				
		10週	4-2共役ジエンと共鳴		共役ジエンへの1,4-付加を説明できる。		
		11週	4-3アルキン		アルキンとはどのような化合物か説明できる。		
		12週	5.芳香族化合物 (5章) 5-1ベンゼンの構造 (電子構造, 共鳴, 非局在化)		芳香族化合物の共鳴構造を説明できる。		
		13週	5-2芳香族化合物の命名法		芳香族化合物の共鳴構造を説明できる。		
		14週	5-3芳香族求電子置換反応		芳香族求電子置換反応を例示し, 説明できる。		
		15週	5-4置換基効果と配向性		置換基効果と配向性を共鳴構造から説明できる。		
		16週	定期試験				
評価割合							
	中間試験		定期試験		課題	合計	
総合評価割合	35		45		20	100	
基礎的能力	35		45		20	100	
専門的能力	0		0		0	0	

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	生物学
科目基礎情報						
科目番号	0021		科目区分		専門 / 必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数		履修単位: 1	
開設学科	創造工学科（応用化学・生物系共通科目）		対象学年		2	
開設期	通年		週時間数		1	
教科書/教材	船登惟希著「宇宙一わかりやすい高校生物」学研教育出版／参考書：志村二三夫編「解剖生理学 人体の構造と機能」羊土社、岡田隆夫著「楽しく分かる生物・化学・物理」羊土社、上村慎治監訳「ケイン生物学」東京化学同人					
担当教員	宇津野 国治					
到達目標						
1. 生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について理解できる。 2. 生体の恒常性を維持するためのしくみを理解できる。						
ルーブリック						
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
1. 生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について理解できる。		生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について理解できる。		生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について概ね理解できる。		生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について理解できない。
2. 生体の恒常性を維持するためのしくみを理解できる。		生体の恒常性を維持するためのしくみを理解できる。		生体の恒常性を維持するためのしくみを概ね理解できる。		生体の恒常性を維持するためのしくみを理解できない。
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	前期は生物の共通性である、細胞、エネルギーと代謝、遺伝情報の発現について学習する。後期は生体の恒常性を維持するためのしくみを学習する。					
授業の進め方・方法	事前に教科書を読んできていることを前提に授業を進める。授業中には教科書を使用せずに考えたり、議論したりする。メモを取るためのノートを必ず持参すること。授業の最後に授業のまとめを作成し、理解度を確認する。定期試験、小テスト、課題・発表（グループワークを含む）、および授業のまとめで達成度を評価する。割合は定期試験（2回）各30%、小テスト20%、課題・発表10%、授業のまとめ10%とし、合格点は60点以上である。再試験（定期試験分）は最終評価が60点未満の者に1度のみ実施する。授業態度の悪い者や小テストの平均点が40点未満の者は再試験を受験できない。					
注意点	昨年度に履修した地学・生物の「生物の特徴」の単元を十分に復習すること。また、予習として事前に教科書を読んでおく必要がある。試験直前の学習だけでは十分な理解に繋がらないので、日頃から学習する習慣を身につけること。課題・発表を行わなかった場合やグループワークに積極的に取り組んでいない場合には評価を60点未満とする。正当な理由がなく欠席した場合（理由を証明できない場合も含む）には、その回の小テストおよび授業のまとめの点数は0点となる。不正行為を行った場合には成績評価を0点とする。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	原核生物と真核生物		原核生物と真核生物の違いについて説明できる。	
		2週	細胞小器官		核、ミトコンドリア、葉緑体、細胞壁、液胞の構造と働きについて説明できる。	
		3週	共生説		葉緑体とミトコンドリアの進化の説について説明できる。	
		4週	酵素		酵素とは何か説明でき、代謝における酵素の役割を説明できる。	
		5週	ATP		代謝、異化、同化という語を理解しており、生命活動のエネルギーの通貨としてのATPの役割について説明できる。	
		6週	呼吸と光合成		光合成及び呼吸の大まかな過程を説明でき、2つの過程の関係を説明できる。	
		7週	DNA		DNAの構造について説明できる。	
		8週	遺伝情報の流れ		遺伝情報とタンパク質の関係について説明できる。	
	2ndQ	9週	セントラルドグマと突然変異		セントラルドグマと突然変異について説明できる。	
		10週	遺伝子の正体①		グリフィスの実験について説明できる。	
		11週	遺伝子の正体②		エイブリーらの実験について説明できる。	
		12週	細胞の分化		分化について説明できる。	
		13週	遺伝情報の分配		染色体の構造について説明できる。	
		14週	細胞周期		細胞周期について説明できる。	
		15週	ゲノムと核相		ゲノムと遺伝子の関係について説明できる。	
		16週	定期試験			
後期	3rdQ	1週	前期学習内容の発表		前期で学習した内容に関して、自分で調査した内容を分かりやすくパワーポイントを用いて発表できる。	
		2週	恒常性		恒常性について説明できる。	
		3週	循環系		心臓の構造と血液の循環について説明できる。	
		4週	血液		血液成分の種類とはたらきについて説明できる。	
		5週	肝臓		肝臓のはたらきについて説明できる。	
		6週	腎臓		腎臓の構造とはたらきを説明できる。	
		7週	拡散と浸透		細胞膜を通しての浸透について説明できる。	
		8週	神経系		神経系について説明できる。	
	4thQ	9週	ホルモンと受容体		ホルモンとその受容体について説明できる。	
		10週	ホルモンと内分泌腺		ホルモンとその主要な内分泌腺とそこから放出されるホルモンを説明できる。	

		11週	ホルモンによる調節	フィードバック制御による体内の恒常性の仕組みを説明できる。		
		12週	自然免疫	自然免疫について説明できる。		
		13週	獲得免疫	獲得免疫について説明できる。		
		14週	免疫と医療	免疫と医療や疾患についての関係を説明できる。		
		15週	後期学習内容の発表	後期で学習した内容に関して、自分で調査した内容を分かりやすくパワーポイントを用いて発表できる。		
		16週	定期試験			
評価割合						
	前期定期試験	後期定期試験	小テスト	課題・発表	授業のまとめ	合計
総合評価割合	30	30	20	10	10	100
基礎的能力	20	20	20	5	5	70
専門的能力	10	10	0	5	5	30

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	応用化学・生物実験 I	
科目基礎情報							
科目番号	0022			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	履修単位: 3		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	2		
開設期	通年			週時間数	3		
教科書/教材	教科書：自作プリント、津波古充朝他著「わかりやすい化学実験－基本操作とチェックポイント－」廣川書店／参考書：化学同人編集部編「正・続 実験を安全に行うために」化学同人、泉他監修「化学のレポートと論文の書き方」化学同人、高木誠司著「定性分析化学 (中巻)」南江堂、松浦他著「無機半微量分析～第2版～」東京化学同人、林・段共著「基礎分析化学実験」共立出版						
担当教員	大島 和浩,奥田 弥生,甲野 裕之,佐藤 森,橋本 久穂,平野 博人,藤田 彩華,古崎 毅						
到達目標							
1. 硫化水素発生装置を正しく使用してガスを発生させることができる。 2. 第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各種試薬との反応性の違いによって分離・検出することができる。 3. 実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができる。 4. 試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。 5. 得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。 6. 使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。 7. 7. 蒸留、濾過、再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。 8. 沸点測定、融点測定及び薄層クロマトグラフィー分析による試料同定の考え方を理解し、これを実践できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
1. 硫化水素発生装置を正しく使用してガスを発生させることができる。	硫化水素発生装置を正しく使用してガスを発生させることができる。		硫化水素発生装置を正しく使用してガスを発生させることが概ねできる。		硫化水素発生装置を正しく使用してガスを発生させることができない。		
2. 第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各種試薬との反応性の違いによって分離・検出することができる。	第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各種試薬との反応性の違いによって分離・検出することができる。		第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各種試薬との反応性の違いによって分離・検出することが概ねできる。		第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各種試薬との反応性の違いによって分離・検出することができない。		
3. 実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができる。	実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができる。		実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことが概ねできる。		実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができない。		
4. 試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。	試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。		試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることが概ねできる。		試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができない。		
5. 得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。	得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。		得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することが概ねできる。		得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができない。		
6. 使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。	使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。		使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことが概ねできる。		使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができない。		
7. 蒸留、濾過、再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。	蒸留、濾過、再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。		蒸留、濾過、再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。		蒸留、濾過、再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	分析実験及び有機実験を遂行するための基本的な方法を習得し、実験結果をレポートとして適切にまとめる能力を養成する。						
授業の進め方・方法	1/4～2/4期で分析化学 (定性分析)、3/4期で分析化学 (定量分析)、4/4期で有機化学に関する基礎的な実験を行う。実験に関わる理論等は実験の始めに解説する他、関連科目でも学習するので、内容の十分な理解のためには、予習・復習が肝要である。正確かつ安全に実験を進めるために、使用する薬品の物性を実験開始前に十分に理解していなければならない。						
注意点	実験室では、安全確保のため白衣と (保護) メガネを必ず着用すること。また、サンダル・スカート・半ズボンなどは危険なので、実験の際は着用してはならない。実験中は携帯電話の使用を禁止する。実験書・ノート (ルーズリーフ不可) は毎回持参すること。実験内容に応じて、電卓・定規・グラフ用紙を各自用意すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ガイダンス・ガスバーナーの取扱い		ガスバーナーを正しく取扱うことができる。		
		2週	硫化水素ガスの発生		硫化水素発生装置を正しく使用して硫化水素ガスを発生させることができる。		
		3週	硫化物法による陽イオンの分離1		硫化水素法を用いて、陽イオンを第1属から第6属までグループ分けできる。		
		4週	硫化物法による陽イオンの分離2		同上		
		5週	第1属陽イオンの各個反応1		第1属陽イオンと各試薬との反応性の違いにより、分離・検出できる。		
		6週	第1属陽イオンの各個反応2		同上		
		7週	第1属陽イオンの系統反応1		同上		
		8週	第1属陽イオンの系統反応2		同上		
	2ndQ	9週	第2属A類陽イオンの各個反応1		第1属A類陽イオンと各試薬との反応性の違いによって分離・検出できる。		
		10週	第2属A類陽イオンの各個反応2		同上		

後期		11週	未知イオンの検出	第1属陽イオンおよび第2属A類陽イオンと各試薬との反応性の違いによって分離・検出できる。	
		12週	容量分析法の基礎	実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができる。	
		13週	混合塩基溶液の逐次滴定1	試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。	
		14週	混合塩基溶液の逐次滴定2	同上	
		15週	レポート作成指導	得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。	
		16週			
	3rdQ	1週	さらし粉中の有効塩素の定量1	試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。	
		2週	さらし粉中の有効塩素の定量2	実験書記載の手順や指導者の指示に従って重量分析及び容量分析を正確かつ安全に行うことができる。 試料の種類や実験操作の目的に合う器具・装置を適切に選択し、それらを正しく用いて実験を遂行し、正確な実験結果を得ることができる。 得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。	
		3週	銀滴定による海水・温泉水中の塩化物イオンの定量1	同上	
		4週	銀滴定による海水・温泉水中の塩化物イオンの定量2	同上	
		5週	キレート滴定法による河川水の硬度測定	同上	
		6週	ルツボの恒量	同上	
		7週	硫酸根の重量分析	同上	
		8週	レポート作成指導	得られた測定値を理論に従って解析し、結果を表やグラフにまとめ、適切な日本語で説明することができる。	
		4thQ	9週	p-Red合成の実験理論の説明	使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。 蒸留・濾過・再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。
			10週	アニリンの蒸留とアセトアニリドの合成	同上
			11週	基礎同定操作1	沸点測定、融点測定および薄層クロマトグラフィー分析による試料同定の考え方を理解し、これを実践できる。
			12週	アセトアニリドのニトロ化	使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。 蒸留・濾過・再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。
			13週	異性体分離	同上
			14週	基礎同定操作2	沸点測定、融点測定および薄層クロマトグラフィー分析による試料同定の考え方を理解し、これを実践できる。
			15週	p-Redの合成	使用する化学薬品の物性、危険性を理解して正しく取り扱うことができる。 蒸留・濾過・再結晶など有機合成に必要な基本操作の方法を理解し、遂行することができる。
			16週		

評価割合			
	レポート	実技評価	合計
総合評価割合	70	30	100
基礎的能力	70	30	100
専門的能力	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	無機化学Ⅱ	
科目基礎情報							
科目番号	0008			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	履修単位: 1		
開設学科	創造工学科（応用化学・生物系共通科目）			対象学年	3		
開設期	前期			週時間数	前期:2		
教科書/教材	教科書：古崎 毅・奥田弥生著「苫小牧工業高等専門学校物質工学科の学生のための無機化学」、実教出版編集部編「増補新訂版 サイエンスビュー化学総合資料」実教出版／参考図書：R.B.Heslop著、斎藤喜彦訳「無機化学（上・下）」東京化学同人、R.B.Heslop著、齋藤善彦訳「演習無機化学 計算問題とその解き方」東京化学同人、B.D.Cullity著、松村源太郎訳「新版X線回折要論」アグネ						
担当教員	古崎 毅						
到達目標							
1. 結晶固体の単位格子の構造を正しく表記でき、X線の回折とBraggの法則を説明できる。 2. 結晶の基本構造を描き、充填率の計算ができる。 3. イオンの大きさと配位数の関係を説明できる。 4. 代表的なイオン結晶の構造を描くことができる。 5. イオン結晶における欠陥構造の特徴を説明できる。 6. その他の結合からなる結晶の代表的な構造と特性を説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
1. 結晶固体の単位格子の構造を正しく表記でき、X線の回折とBraggの法則を説明できる。	結晶固体の単位格子の構造を正しく表記でき、X線の回折とBraggの法則を説明できる。		結晶固体の単位格子の構造を正しく表記でき、X線の回折とBraggの法則の基本的な説明ができる。		結晶固体の単位格子の構造を正しく表記できず、X線の回折とBraggの法則の基本的な説明ができない。		
2. 結晶の基本構造を描き、充填率の計算ができる。	結晶の基本構造を描き、充填率の計算ができる。		結晶の基本構造を描き、充填率の基本的な計算ができる。		結晶の基本構造を描けず、充填率の基本的な計算ができない。		
3. イオンの大きさと配位数の関係を説明できる。	イオンの大きさと配位数の関係を説明できる。		イオンの大きさと配位数の関係の基本的な説明ができる。		イオンの大きさと配位数の関係の基本的な説明ができない。		
4. 代表的なイオン結晶の構造を描くことができる。	代表的なイオン結晶の構造を描くことができる。		代表的なイオン結晶の基本的な構造を描くことができる。		代表的なイオン結晶の基本的な構造を描くことができない。		
5. イオン結晶における欠陥構造の特徴を説明できる。	イオン結晶における欠陥構造の特徴を説明できる。		イオン結晶における欠陥構造の特徴の基本的な説明ができる。		イオン結晶における欠陥構造の特徴の基本的な説明ができない。		
6. その他の結合からなる結晶の代表的な構造と特性を説明できる。	その他の結合からなる結晶の代表的な構造と特性を説明できる。		その他の結合からなる結晶の代表的な構造と特性の基本的な説明ができる。		その他の結合からなる結晶の代表的な構造と特性の基本的な説明ができない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	固体の構造（空間格子、イオン結晶、共有結合結晶、金属結晶、分子結晶、水素結合結晶など）についての基礎知識を教授する。						
授業の進め方・方法	講義は、2年生の無機化学Ⅰで習得した知識を元に、座学方式で行う。課題及び小テストを課すことにより理解を深めるようにする。到達目標を達成できているかどうかを試験及び課題により総合評価する（中間時期の達成度確認40％、定期試験45％、及び課題・小テスト15％の割合）。合格点は60点である。成績評価が40点から60点に満たない学生については再試験を行うことがあり、試験分（85％分）の再評価をするものとする。なお、再試験を受けた学生の評価点は60点を越えないものとする。						
注意点	講義には、電卓、定規、テンプレートを用意すること。授業で課される課題・予習は自学自習により取り組むこと。課題は添削後、返却する。到達目標が達成されていない場合には再提出を求める。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	固体の構造（1）：結晶構造の表し方,ミラー指数		結晶固体の単位格子の構造を正しく表記できる。		
		2週	固体の構造（2）：X線の回折, Braggの法則		X線の回折原理とBraggの法則を説明できる。		
		3週	固体の構造（3）：剛体球モデルに基づく単純立方構造と体心立方構造		結晶の基本構造を描き、充填率を計算できる。		
		4週	固体の構造（4）：剛体球モデルに基づく立方最密充填構造と六方最密充填構造		同上		
		5週	固体の構造（1）：イオン結晶構造におけるイオン半径比と配位数の関係		イオンの大きさと配位数の関係を説明できる。		
		6週	イオン結晶の構造（2）：CsCl型結晶構造		代表的なイオン結晶の構造を描くことができる。		
		7週	イオン結晶の構造（3）：NaCl型結晶構造		同上		
		8週	イオン結晶の構造（4）：閃亜鉛鉱型結晶構造		同上		
		9週	イオン結晶の構造（5）：ウルツ鉱型結晶構造		同上		
	2ndQ	10週	イオン結晶の構造（6）：蛍石型結晶構造		同上		
		11週	イオン結晶の構造（7）：ルチル型結晶構造とペロブスカイト型結晶構造		同上		
		12週	結晶の欠陥構造（Schottky欠陥, Frenkel欠陥等）		イオン結晶における欠陥構造の特徴を説明できる。		
		13週	共有結合結晶		共有結合結晶の構造と特性を説明できる。		
		14週	金属結晶, 分子結晶		金属結晶及び分子結晶の構造と特性を説明できる。		
		15週	水素結合結晶, 固溶体と合金		水素結合結晶の構造と特性, 固溶体と合金を説明できる。		
		16週	定期試験				
評価割合							
	中間時期の達成度確認		定期試験		課題・小テスト		合計
総合評価割合	40		45		15		100

基礎的能力	30	30	15	75
專門的能力	10	15	0	25
分野横断的能力	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	有機化学Ⅱ	
科目基礎情報							
科目番号	0009			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	3		
開設期	前期			週時間数	前期:2		
教科書/教材	J. McMurry著, 児玉 三明 他訳「マクマリー有機化学概説 第6版」東京化学同人／Paula Y. Bruice著, 大船泰史他 監訳「ブルース有機化学概説第2版」化学同人, Janice Gorzynski Smith著, 山本 尚他 監訳「スミス基礎有機化学」化学同人, R.T. Morrison, R.N. Boyd 著, 中西 香爾他 訳「モリソン・ボイド 有機化学」東京化学同人, S.H. Pine著, 湯川 泰秀 他監訳「パイン有機化学」廣川書店, K.P.C. Vollhardt, N.E. Schore 著, 古賀 憲司 他訳「ボルハルト・ショア一現代有機化学」化学同人						
担当教員	橋本 久穂						
到達目標							
立体化学の表示の規則を理解し, キラルな化合物の立体化学を説明できる. ハロゲン化アルキル, アルコール・フェノール・エーテル・チオール・スルフィド・カルボニル化合物を命名し, 性質および代表的な製法・反応を説明できる. 求核付加反応, 求核アシル置換反応の反応機構を書くことができる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	立体化学の表示の規則を理解し, キラルな化合物の立体化学を説明できる.			立体化学の表示の規則を概ね理解し, キラルな化合物の立体化学を概ね説明できる.		立体化学の表示の規則を理解できず, キラルな化合物の立体化学を説明できない.	
到達目標2	ハロゲン化アルキル, アルコール・フェノール・エーテル・チオール・スルフィド・カルボニル化合物を命名し, 性質および代表的な製法・反応を説明できる.			ハロゲン化アルキル, アルコール・フェノール・エーテル・チオール・スルフィド・カルボニル化合物を命名し, 性質および代表的な製法・反応を概ね説明できる.		ハロゲン化アルキル, アルコール・フェノール・エーテル・チオール・スルフィド・カルボニル化合物を命名し, 性質および代表的な製法・反応を説明できない.	
到達目標3	求核付加反応, 求核アシル置換反応の反応機構を書くことができる.			求核付加反応, 求核アシル置換反応の反応機構を概ね書くことができる.		求核付加反応, 求核アシル置換反応の反応機構を書くことができない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	有機化学Ⅰに引き続き, 官能基別に有機化合物の命名法, 性質, 製法, 反応を学ぶ. 加えてキラル化合物の構造と性質を理解するために立体化学を学習する. 学習する化合物はハロゲン化アルキル, アルコール, フェノール, エーテル, チオール, チオエーテル, アルデヒド, ケトン, カルボン酸とその誘導体である. 二年生で学習した有機化学の理解が必須である. 講義中に用いた化合物を分子模型で作製し, 立体構造のイメージトレーニングに励むこと.						
授業の進め方・方法	有機化学を学習する上で基礎となる有機化合物であるハロゲン化アルキル, アルコール・フェノール・エーテル・チオール・スルフィド・カルボニル化合物の性質・製法・反応・命名法に関する基礎的な知識を教授する. 加えて立体化学を学ぶ. 教科書・ノート・分子模型を持参すること. 自学自習時間として, 日常の授業のための予習復習時間, 理解を深めるための演習課題, および各試験の準備のための勉強時間を総合したものとする.						
注意点	課題・試験において授業項目に対する到達目標に関する問題を出題し, 達成度を総合的に評価する (中間試験35%, 定期試験45%, 課題20%). 合格点は60点である. 成績評価が60点未満の場合は再試験を実施することがある. ただし, 再試験の得点は上記の定期試験と中間試験の占める割合 (80%) までとし, 再試験を受けた者の成績評価は60点を超えないものとする.						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	立体化学 (6章) 立体中心, 対掌性		分子の対掌性を見つけることができる. キラル, アキラルを区別できる.		
		2週	光学活性, 比旋光度, ラセミ体		比旋光度を求めることができる. R, S表記で立体異性体を表現できる.		
		3週	鏡像異性体とジアステレオマー		エナンチオマーとジアステレオマーを認識できる.		
		4週	メソ化合物, 自然界におけるキラリティー		メソ化合物について構造を例示でき, 説明できる. 自然界のキラリティーについて概要を説明できる.		
		5週	ハロゲン化アルキル 命名法, 製法		ハロゲン化アルキルを命名できる. ハロゲン化アルキルの一般的製法を例示できる.		
		6週	ハロゲン化アルキルの反応 (Grignard反応)		ハロゲン化アルキルが起こす反応を示すことができる. Grignard反応について説明できる.		
		7週	求核置換反応 (SN1反応と SN2反応)		求核置換反応の反応例を例示でき, その反応機構を簡単に説明できる.		
		8週	脱離反応 (E1反応とE2反応)		脱離反応の反応例を例示でき, その反応機構を簡単に説明できる.		
	2ndQ	9週	アルコール, フェノール, エーテル, チオールとスルフィド (8章) 命名法, 水素結合と酸性度		アルコール・フェノール・エーテル, チオール・スルフィドを命名できる. 水素結合, 酸性度を説明できる.		
		10週	製法と反応		例をあげてアルコール, フェノール, エーテルの代表的な製法, 反応を説明できる.		
		11週	前期中間試験				
		12週	アルデヒドとケトン (9章) アルデヒドとケトンの性質, 命名法		アルデヒドとケトンの概要と命名を説明できる.		
		13週	製法と反応		アルデヒド・ケトンの代表的な製法・反応を説明できる.		
		14週	求核付加反応		求核付加反応の反応機構を説明できる.		
		15週	カルボン酸とその誘導体 (10章) 命名法, 存在と性質		カルボン酸とその誘導体を命名し, その性質を説明できる.		

		16週	前期定期試験	
評価割合				
	中間試験	定期試験	課題	合計
総合評価割合	35	45	20	100
基礎的能力	35	45	20	100
専門的能力	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	物理化学 I	
科目基礎情報							
科目番号	0010			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	3		
開設期	後期			週時間数	後期:2		
教科書/教材	教科書: 福地賢治著「物理化学」実教出版 / 教材: 1) P.W.Atkins著 千原秀昭・中村巨男訳「アトキンス 物理化学 第6版」東京化学同人, 2) David W.Ball著 田中一義・阿竹徹監訳「ボール 物理化学」化学同人, 3) W.J.Moore著 細矢治夫・湯田坂雅子訳「ムーア 基礎物理化学」東京化学同人, 4) D.A.McQuarrie, J.D.Simon著 千原英昭・齊藤一弥・江口太郎訳「物理化学－分子論的アプローチ」東京化学同人, 5) 米山宏著「電気化学」大日本図書.						
担当教員	甲野 裕之						
到達目標							
気体の法則を正しく理解し、熱力学第一法則に基づいてエンタルピー、仕事、内部エネルギーを求めることができること。さらに熱力学第二・第三法則を理解し、エントロピーと化学変化の方向を明らかにできること。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1) 気体の法則について正しく理解できる。		気体の法則について正しく理解できる。		気体の法則について理解できる。		気体の法則について理解できない。	
2) 熱力学第一法則を理解し、エネルギー保存則により、エンタルピー、仕事、内部エネルギーを求めることができる。		熱力学第一法則を理解し、エネルギー保存則により、エンタルピー、仕事、内部エネルギーを求めることができる。		熱力学第一法則を理解し、エネルギー保存則により、エンタルピー、仕事、内部エネルギーを求めることができる。		熱力学第一法則を理解できない。エネルギー保存則が理解できない。	
3) 熱力学第二・第三法則を説明でき、エントロピーと化学変化の方向について説明できる。		熱力学第二・第三法則を説明でき、エントロピーと化学変化の方向について計算から正しく求めることができる。		熱力学第二・第三法則を説明でき、エントロピーと化学変化の方向について計算ができる。		熱力学第二・第三法則を説明できない。エントロピーと化学変化の方向について計算から求めることができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	物理化学をにおける「気体の性質」、「熱力学第一法則」、「熱力学第二・第三法則」についてその基本について教授する。						
授業の進め方・方法	物理化学分野における「気体の法則」、「熱力学」の基礎的知識について説明する。主に座学形式で実施し、適宜演習と課題により、その内容の理解度を高める。講義前には教科書の該当部分を予習し、授業終了後には学習内容について復習を心がけること。講義時にはノート、筆記用具、関数電卓を持参すること。ルーブリックへの評価は評価割合に従って決定する(各到達目標について演習・課題 (20%)、中間試験 (40%)、定期試験 (40%) で評価し、合格点は60点以上とする)。						
注意点	評価が60点に満たない者について再試験は原則実施しないが、授業態度、授業への取組みを考慮した上で実施する場合がある。なお再試験受験者の評価は60点を越えないものとする。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	気体の法則 (1)		気体の法則を理解できる。		
		2週	気体の法則 (2)		気体の分子速度論から圧力を定義できる。		
		3週	気体の法則 (3)		気体の分子速度と圧力の関係から、理想気体の方程式を説明できる。		
		4週	気体の法則 (4)		実在気体の特徴と状態方程式の関係を説明できる。		
		5週	気体の法則 (5)		臨界現象と臨界点近傍の特徴について説明できる。		
		6週	気体の法則 (6)		混合気体についてモル分率と分圧を計算できる。		
		7週	熱力学第一法則 (1)		熱力学の第一法則を定義し、熱・仕事・内部エネルギーについて説明できる。		
		8週	熱力学第一法則 (2)		熱力学の第一法則を定義し、熱・仕事・内部エネルギーについて説明できる。		
	4thQ	9週	熱力学第一法則 (3)		熱容量の定義と反応熱について理解できる。		
		10週	熱力学第一法則 (4)		標準生成エンタルピーを計算できる。		
		11週	熱力学第一法則 (5)		エンタルピーの温度依存性を説明し、計算できる。		
		12週	熱力学第二・第三法則 (1)		化学反応におけるエントロピー変化を説明できる。		
		13週	熱力学第二・第三法則 (2)		純物質の絶対エントロピーを説明できる。		
		14週	熱力学第二・第三法則 (3)		標準生成自由エネルギーを計算できる。		
		15週	熱力学第二・第三法則 (4)		反応における自由エネルギー変化から平衡定数を計算できる。		
		16週	定期試験				
評価割合							
	中間試験		定期試験		演習・課題		合計
総合評価割合	40		40		20		100
基礎的能力	32		32		16		80
専門的能力	8		8		4		20

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	生化学 I
科目基礎情報						
科目番号	0011		科目区分		専門 / 必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数		履修単位: 1	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		3	
開設期	後期		週時間数		後期:2	
教科書/教材	H.R. Horton他著 鈴木紘一他監訳 「ホートン 生化学 第5版」 東京化学同人／参考書：Pratt他著 須藤和夫他訳 「エッセンシャル 生化学 第3版」 東京化学同人					
担当教員	宇津野 国治					
到達目標						
1. アミノ酸や糖, 脂質, 核酸の構造を書くことができる。 2. タンパク質や糖, 脂質の機能を説明することができる。						
ルーブリック						
		理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)
1. アミノ酸や糖, 脂質, 核酸の構造を書くことができる。		アミノ酸や糖, 脂質, 核酸の構造を書くことができる。		アミノ酸や糖, 脂質, 核酸の構造を概ね書くことができる。		アミノ酸や糖, 脂質, 核酸の構造を書くことができない。
2. タンパク質や糖, 脂質の機能を説明することができる。		タンパク質や糖, 脂質の機能を説明することができる。		タンパク質や糖, 脂質の機能を概ね説明することができる。		タンパク質や糖, 脂質の機能を説明することができない。
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	生体を構成する主要な物質, および生物が利用する代表的な物質の構造と性質を覚え, 生体内でそれらがどのように役立っているのかを理解することを目指す。					
授業の進め方・方法	授業は, 教員による説明のほかにグループワークや発表を行う。毎回, 授業の最初に小テストを実施し, 授業の最後に授業のまとめを作成することによって, 理解度を確認する。成績評価は, 中間試験30%, 定期試験30%, 小テスト20%, 授業のまとめ15%, 発表5%である。合格点は60点以上とする。再試験は中間・定期試験分の60%とする。授業態度が悪い者や小テストの平均点が40点未満の者には, 原則として再試験を実施しない。正当な理由なく発表を行わなかった場合や課題を提出しなかった場合には最終評価を60点未満とする。授業態度の悪い者や小テストの平均点が40点未満の者は再試験を受験できない。					
注意点	正当な理由なく発表を行わなかった場合やグループワークに積極的に取り組んでいない場合には評価を60点未満とする。正当な理由がなく欠席した場合 (理由を証明できない場合も含む) には, その回の小テストおよび授業のまとめの点数は0点となる。不正行為を行った場合には成績評価を 0 点とする。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	生化学入門, 水 (教科書pp.3~44)		タンパク質, 核酸, 多糖がそれぞれモノマーによって構成されていることを説明できる。生体物質にとって重要な弱い化学結合(水素結合や疎水性相互作用など)を説明できる。	
		2週	アミノ酸とタンパク質の一次構造 (教科書pp.47~71)		タンパク質の機能をあげることができ, タンパク質が生命活動の中心であることを説明できる。タンパク質を構成するアミノ酸をあげることができ, それらの側鎖の特徴を説明できる。	
		3週	アミノ酸とタンパク質の一次構造 (教科書pp.47~71)		アミノ酸の構造とペプチド結合の形成について構造式を用いて説明できる。	
		4週	タンパク質: 三次元構造と機能 (教科書pp.72~113)		タンパク質の高次構造について説明できる。	
		5週	酵素の特性 (教科書pp.114~135)		酵素の性質(基質特異性や最適温度など)について説明できる。	
		6週	酵素の特性 (教科書pp.114~135)		ミカエリス・メンテン式について説明できる。	
		7週	酵素の反応機構 (教科書pp.136~163)		酵素の構造と酵素-基質複合体について説明できる。	
		8週	中間試験		1~7週までの知識が定着していることを確認できる。	
	4thQ	9週	補酵素とビタミン (教科書pp.164~188)		補酵素の働きを例示できる。水溶性ビタミンとの関係を説明できる。	
		10週	糖質 (教科書pp.189~212)		単糖と多糖の生物機能を説明できる。単糖の化学構造を説明でき、各種の異性体について説明できる。	
		11週	糖質 (教科書pp.189~212)		グリコシド結合を説明できる。多糖の例を説明できる。	
		12週	脂質と生体膜 (教科書pp.213~246)		脂質の機能を複数あげることができる。トリアシルグリセロールの構造を説明できる。脂肪酸の構造を説明できる。	
		13週	脂質と生体膜 (教科書pp.213~246)		リン脂質が作るミセル、脂質二重層について説明でき、生体膜の性質を説明できる。	
		14週	核酸 (教科書pp.485~508)		ヌクレオチドの構造を説明できる。DNAの二重らせん構造、塩基の相補的結合を説明できる。	
		15週	生化学に関する発表		生化学に関して調査した内容をパワーポイントを用いて発表することができる。また、他人の発表を聞いて質問などを考えることができる。	
		16週	定期試験			
評価割合						
	中間試験	定期試験	小テスト	授業のまとめ	発表	合計
総合評価割合	30	30	20	15	5	100
基礎的能力	15	15	10	5	0	45

專門的能力	15	15	10	5	0	45
分野横断的能力	0	0	0	5	5	10

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	化学工学 I
科目基礎情報						
科目番号	0012		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	3		
開設期	後期		週時間数	後期:2		
教科書/教材	化学工学会監修 多田豊編「化学工学 (改訂第3版) –解説と演習–」朝倉書店 / Warren McCabe,“Unit Operations of Chemical Engineering (Mcgraw-Hill Chemical Engineering Series)”,Mcgraw-Hill,2004					
担当教員	平野 博人					
到達目標						
1.化学工学で扱う諸量の単位換算ができ、次元式で表すことができる。 2.気体の状態方程式を用いて諸量を計算で求めることができる。 3.物質収支の考えを理解し、収支計算ができる。 4.両対数グラフ、片対数グラフを使って実験式を求めることができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	化学工学で扱う諸量の単位換算ができ、次元式で表すことができる。		化学工学で扱う諸量の基本的な単位換算ができ、次元式で表すことができる。		化学工学で扱う諸量の単位換算や、次元式で表すことができない。	
到達目標2	気体の状態方程式を用いて諸量を計算で求めることができる。		気体の状態方程式を用いて基本的な諸量を計算で求めることができる。		気体の状態方程式を用いて諸量を計算で求めることができない。	
到達目標3	物質収支の考えを理解し、収支計算ができる。		物質収支の考えを理解し、基本的な収支計算ができる。		物質収支の考えを理解できず、収支計算ができない。	
到達目標4	両対数グラフ、片対数グラフを使って実験式を求めることができる。		両対数グラフ、片対数グラフを使うことができる。		両対数グラフ、片対数グラフを使うことができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	化学工学は、化学製造工程を効率よく経済的に行わせるための学問で、主に製造工程に应用されている機器ならびに装置の操作、設計、製作及び運転が目標である。しかし、これらの知識を全て取得するには広く工学の基本的な学問が必要であるが、ここでは化学工学の基礎である化学工学量論について初歩的な知識を教授する。化学工学Ⅱ、化学工学演習、プロセス設計へと繋がる科目である。					
授業の進め方・方法	授業には関数電卓、定規、グラフ用紙を用意すること。 授業項目毎に配布される演習課題に自学自習により取り組むこと。演習問題は添削後、目標が達成されていることを確認し、返却する。目標が達成されていない場合には、再提出を求めることがある。 授業項目と達成目標に関する内容の試験および演習で総合的に達成度を評価する。割合は定期試験40%、中間試験40%、演習20%とし、合格点は60点である。					
注意点	自学自習時間とは、日常の授業の予習復習時間、理解を深めるための演習課題、および各試験準備のための時間を総合したものとする。 評価が60点未満の者に対して再試験を実施することがあるが、課題提出や授業態度等が著しく不良な場合は受験を認めない。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	1.単位と次元 1-1.単位と単位換算 (1)		化学工学で扱う諸量の単位換算ができる。	
		2週	1.単位と次元 1-1.単位と単位換算 (2)		化学工学で扱う諸量の単位換算ができる。	
		3週	1.単位と次元 1-2.次元と次元解析 (1)		化学工学で扱う諸量を次元式で表すことができる。	
		4週	1.単位と次元 1-2.次元と次元解析 (2)		化学工学で扱う諸量を次元式で表すことができる。	
		5週	1.単位と次元 1-2.次元と次元解析 (3)		化学工学で扱う諸量を次元式で表すことができる。	
		6週	2.気体の状態方程式 (1)		気体の状態方程式を用いて諸量を計算で求めることができる。	
		7週	2.気体の状態方程式 (2)		気体の状態方程式を用いて諸量を計算で求めることができる。	
		8週	後期中間試験			
	4thQ	9週	3.物質収支 3-1.化学変化を伴わない物質収支 (1)		物質収支の考えを理解し、化学変化を伴わない収支計算ができる。	
		10週	3.物質収支 3-1.化学変化を伴わない物質収支 (2)		物質収支の考えを理解し、化学変化を伴わない収支計算ができる。	
		11週	3.物質収支 3-2.化学変化を伴う物質収支 (1)		物質収支の考えを理解し、化学変化を伴う収支計算ができる。	
		12週	3.物質収支 3-2.化学変化を伴う物質収支 (2)		物質収支の考えを理解し、化学変化を伴う収支計算ができる。	
		13週	3.物質収支 3-2.化学変化を伴う物質収支 (3)		物質収支の考えを理解し、化学変化を伴う収支計算ができる。	
		14週	4.図表の取り扱い (1)		両対数グラフ、片対数グラフを使うことができる。	
		15週	4.図表の取り扱い (2)		両対数グラフ、片対数グラフを使うことができる。	
		16週	定期試験			
評価割合						

	試験	演習					合計
総合評価割合	80	20	0	0	0	0	100
基礎的能力	20	0	0	0	0	0	20
専門的能力	60	20	0	0	0	0	80
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)	授業科目	応用化学・生物実験Ⅱ
科目基礎情報					
科目番号	0013		科目区分	専門 / 必修	
授業形態	実験・実習		単位の種別と単位数	履修単位: 6	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	3	
開設期	通年		週時間数	前期:6 後期:6	
教科書/教材	教科書: 自作テキスト, 化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」化学同人, 泉美治他監修「化学のレポートと論文の書き方」化学同人, 津波古充朝他著「わかりやすい化学実験―基礎操作とチェックポイント」廣川書店 参考図書: バード著, 松田好晴・小倉興太郎共訳「溶液内イオン平衡―理論と計算―」化学同人, 後藤廉平著「物理化学実験法」共立出版				
担当教員	岩波 俊介,宇津野 国治,樫村 奈生,甲野 裕之,清水 祐一,橋本 久穂,平野 博人,古崎 毅				
到達目標					
1. KBr-KCl系の固溶体を作製し, そのX線回折図形より格子定数を算出できる。 2. ガラスを作製し, 浸液法によりその屈折率を測定できる。 3. 材料の真密度・嵩密度・見掛け密度を求めることができる。 4. 電位差滴定より中和反応の滴定曲線を作成できる。 5. 吸光光度法によりBTBの酸解離定数を算出できる。 6. C-C結合形成反応であるマロン酸エステル合成法を通じて, 有機・無機試薬の特性に応じた使用法, 反応装置の組み立てができ, 安全に実験を遂行できる。 7. 有機合成実験で一般的な分析法であるガスクロマトグラフィー法で化合物の定性分析と定量分析ができる。 8. 基本的実験操作である蒸留, 再結晶, 融点測定, 沸点測定, 減圧ろ過などの操作ができる。 9. 文章や図表を用いて実験で得たデータを適切にまとめ報告できる。 10. 溶解度を実測し, 溶解熱を計算することができる。 11. 分解電圧や単極電位を測定できる。 12. 膨張計を使用して, 反応速度および活性化エネルギーを求めることができる。 13. 凝固点降下を測定し, 溶質の分子量を計算できる。 14. 蒸気圧と温度の関係を実測し, 蒸発エンタルピーを計算できる。 15. 糖質, アミノ酸およびタンパク質の定性試験および定量法の原理を理解・説明し実験ができる。 16. 酵素反応における至適温度および至適pHを理解・説明し, その測定ができる。 17. 無菌操作による微生物の接種および光学顕微鏡を用いた微生物の観察ができる。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安		
評価項目1	KBr-KCl系の固溶体を作製し, そのX線回折図形より格子定数を算出できる。	助言を得ながらKBr-KCl系の固溶体を作製し, そのX線回折図形より格子定数を算出できる。	助言を得てもKBr-KCl系の固溶体を作製し, そのX線回折図形より格子定数を算出できない。		
評価項目2	ガラスを作製し, 浸液法によりその屈折率を測定できる。	助言を得ながらガラスを作製し, 浸液法によりその屈折率を測定できる。	助言を得てもガラスを作製し, 浸液法によりその屈折率を測定できない。		
評価項目3	材料の真密度・嵩密度・見掛け密度を求めることができる。	助言を得ながら材料の真密度・嵩密度・見掛け密度を求めることができる。	助言を得ても材料の真密度・嵩密度・見掛け密度を求めることができない。		
評価項目4	電位差滴定より中和反応の滴定曲線を作成できる。	助言を得ながら電位差滴定より中和反応の滴定曲線を作成できる。	助言を得ても電位差滴定より中和反応の滴定曲線を作成できない。		
評価項目5	吸光光度法によりBTBの酸解離定数を算出できる。	助言を得ながら吸光光度法によりBTBの酸解離定数を算出できる。	助言を得ても吸光光度法によりBTBの酸解離定数を算出できない。		
評価項目6	C-C結合形成反応であるマロン酸エステル合成法を通じて, 有機・無機試薬の特性に応じた使用法, 反応装置の組み立てができ, 安全に実験を遂行できる。	助言を得ながらC-C結合形成反応であるマロン酸エステル合成法を通じて, 有機・無機試薬の特性に応じた使用法, 反応装置の組み立てができ, 安全に実験を遂行できる。	助言を得てもC-C結合形成反応であるマロン酸エステル合成法を通じて, 有機・無機試薬の特性に応じた使用法, 反応装置の組み立てができず, 安全に実験を遂行できない。		
評価項目7	有機合成実験で一般的な分析法であるガスクロマトグラフィー法で化合物の定性分析と定量分析ができる。	助言を得ながら有機合成実験で一般的な分析法であるガスクロマトグラフィー法で化合物の定性分析と定量分析ができる。	助言を得ても有機合成実験で一般的な分析法であるガスクロマトグラフィー法で化合物の定性分析と定量分析ができない。		
評価項目8	基本的実験操作である蒸留, 再結晶, 融点測定, 沸点測定, 減圧ろ過などの操作ができる。	助言を得ながら基本的実験操作である蒸留, 再結晶, 融点測定, 沸点測定, 減圧ろ過などの操作ができる。	助言を得ても基本的実験操作である蒸留, 再結晶, 融点測定, 沸点測定, 減圧ろ過などの操作ができない。		
評価項目9	文章や図表を用いて実験で得たデータを適切にまとめ報告できる。	助言を得ながら文章や図表を用いて実験で得たデータを適切にまとめ報告できる。	助言を得ても文章や図表を用いて実験で得たデータを適切にまとめ報告できない。		
評価項目10	溶解度を実測し, 溶解熱を計算することができる。	助言を得ながら溶解度を実測し, 溶解熱を計算することができる。	助言を得ても溶解度を実測し, 溶解熱を計算することができない。		
評価項目11	分解電圧や単極電位を測定できる。	助言を得ながら分解電圧や単極電位を測定できる。	助言を得ても分解電圧や単極電位測定できない。		
評価項目12	膨張計を使用して, 反応速度および活性化エネルギーを求めることができる。	助言を得ながら膨張計を使用して, 反応速度および活性化エネルギーを求めることができる。	助言を得ても膨張計を使用して, 反応速度および活性化エネルギーを求めることができない。		
評価項目13	凝固点降下を測定し, 溶質の分子量を計算できる。	助言を得ながら凝固点降下を測定し, 溶質の分子量を計算できる。	助言を得ても凝固点降下を測定し, 溶質の分子量を計算できない。		
評価項目14	蒸気圧と温度の関係を実測し, 蒸発エンタルピーを計算できる。	助言を得ながら蒸気圧と温度の関係を実測し, 蒸発エンタルピーを計算できる。	助言を得ても蒸気圧と温度の関係を実測し, 蒸発エンタルピーを計算できない。		
評価項目15	糖質, アミノ酸およびタンパク質の定性試験および定量法の原理を理解・説明し実験ができる。	助言を得ながら糖質, アミノ酸およびタンパク質の定性試験および定量法の原理を理解・説明し実験ができる。	助言を得ても糖質, アミノ酸およびタンパク質の定性試験および定量法の原理を理解・説明し実験ができない。		

評価項目16	酵素反応における至適温度および至適pHを理解・説明し、その測定ができる。		助言を得ながら酵素反応における至適温度および至適pHを理解・説明し、その測定ができる。	助言を得ても酵素反応における至適温度および至適pHを理解・説明し、その測定ができない。
評価項目17	無菌操作による微生物の接種および光学顕微鏡を用いた微生物の観察ができる。		助言を得ながら無菌操作による微生物の接種および光学顕微鏡を用いた微生物の観察ができる。	助言を得ても無菌操作による微生物の接種および光学顕微鏡を用いた微生物の観察ができない。
学科の到達目標項目との関係				
教育方法等				
概要	化学の基本的分野である有機化学・無機化学・物理化学・生化学の各分野において実験を遂行する上で必要不可欠な実験操作を修得する。また各分野でよく用いられる機器類を使用しての分析・解析の基礎も修得する。 実験はいくつかの班に分けて各テーマをローテーションで行うことがある。			
授業の進め方・方法	各分野の実験内容に付いて説明を行った後、グループ毎に各テーマの実験を行う。実験終了後、期限までに実験レポートの提出を求められる。 実験姿勢及び実験操作方法の修得度は実験中に各担当教員が、実験の理論と得られた結果の解釈は提出されるレポートの内容からそれぞれ100点法にて採点評価する。成績評価はレポート評価（ノート評価を含む場合がある）70%、実技評価30%として行う。合格点は60点である。ただし、正当な理由なくレポートが提出されない場合には成績評価を60点未満とする。			
注意点	安全に実験を行うために白衣・保護眼鏡等を必ず着用すること。決められた実験テーマ毎にレポートを作成し提出する。実験の遂行およびレポートの作成に当たっては、有機化学、無機化学、物理化学および生化学の知識が不可欠である。ノート提出を課す実験分野があることから、実験ノートは分野毎に用意すること。 実験ノート、電卓・グラフ用紙など実験結果の記録に必要な用具を準備する。			
授業計画				
		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	無機化学実験（1） 無機化学実験の内容と注意事項の説明	（到達目標1～5をふまえた実験内容等の説明）
		2週	無機化学実験（2） KBr-KCl系固溶体の作製とその格子定数の測定 1	KBr-KCl系の固溶体を作製し、そのX線回折図形より格子定数を算出できる。
		3週	無機化学実験（3） KBr-KCl系固溶体の作製とその格子定数の測定 2	同上
		4週	無機化学実験（4） ガラスの作製とその屈折率の測定	ガラスを作製し、浸液法によりその屈折率を測定できる。
		5週	無機化学実験（5） 密度の測定	材料の真密度・嵩密度・見掛け密度を求めることができる。
		6週	無機化学実験（6） 電位差滴定 1	電位差滴定により中和反応の滴定曲線を作成できる。
		7週	無機化学実験（7） 電位差滴定 2	同上
		8週	無機化学実験（8） BTBの酸解離定数の測定	吸光光度法によりBTBの酸解離定数を算出できる。
	2ndQ	9週	有機化学実験（1） 有機化学実験の内容と注意事項の説明	（到達目標6～9をふまえた実験内容等の説明）
		10週	有機化学実験（2） マロン酸エステル合成法による吉草酸の合成	C-C結合形成反応であるマロン酸エステル合成法を通じて、有機・無機試薬の特性に応じた使用法、反応装置の組み立てができ、安全に実験を遂行できる。有機合成実験で一般的な分析法であるガスクロマトグラフィー法で化合物の定性分析と定量分析ができる。基本的実験操作である蒸留、再結晶、融点測定、沸点測定、減圧ろ過などの操作が出来る。文章や図表を用いて実験で得たデータを適切にまとめ報告できる。
		11週	有機化学実験（3） 臭化アセトンの合成とその精製	同上
		12週	有機化学実験（4） マロン酸ジメチルの合成とその同定	同上
		13週	有機化学実験（5） マロン酸の合成	同上
		14週	有機化学実験（6） マロン酸の脱炭酸による吉草酸の合成	同上
		15週	有機化学実験（7） 吉草酸の同定	同上
		16週		
後期	3rdQ	1週	物理化学実験（1） 物理化学実験の内容と注意事項の説明	（到達目標10～14をふまえた実験内容等の説明）
		2週	物理化学実験（2） 溶解度と溶解熱	溶解度を測定し、溶解熱を計算できる。
		3週	物理化学実験（3） 分解電圧と単極電位	分解電圧や単極電位を測定できる。
		4週	物理化学実験（4） 反応速度	膨張計を使用して、反応速度および活性化エネルギーを求めることができる。
		5週	物理化学実験（5） 凝固点降下	凝固点降下を測定し、溶質の分子量を計算できる。
		6週	物理化学実験（6） 蒸気圧	蒸気圧と温度の関係を測定し、蒸発エンタルピーを計算できる。
		7週	物理化学実験（7） 物理化学実験に関する発表	物理化学実験の結果に関する内容を発表できる。
		8週	生化学実験（1） 生化学実験の内容と注意事項の説明	（到達目標15～17をふまえた実験内容等の説明）
	4thQ	9週	生化学実験（2） 還元糖の定性試験	糖質、アミノ酸およびタンパク質の定性試験および定量法の原理を理解・説明し実験ができる。

	10週	生化学実験（3） 比色法による還元糖の定量	同上
	11週	生化学実験（4） アミノ酸の定性試験，TLC法によるアミノ酸の分析	同上
	12週	生化学実験（5） TLC法による還元糖の分析	同上
	13週	生化学実験（6） 糖タンパク質の定量	同上
	14週	生化学実験（7） 唾液アミラーゼによる酵素反応	酵素反応における至適温度および至適pHを理解・説明し、その測定ができる。
	15週	生化学実験（8） 微生物の培養と観察	無菌操作による微生物の接種および光学顕微鏡を用いた微生物の観察ができる。
	16週		
評価割合			
	レポート	実技	合計
総合評価割合	70	30	100
基礎的能力	70	30	100
専門的能力	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	創造工学Ⅲ	
科目基礎情報							
科目番号	0014			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	履修単位: 2		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	3		
開設期	通年			週時間数	前期:2 後期:2		
教科書/教材	なし／自作プリント						
担当教員	宇津野 国治,檜村 奈生						
到達目標							
工学基礎力 (ICT活用、数学活用を含む) を高め、様々な工学分野の課題に対応するための基礎力を身につける。 自身の将来のライフプランや職業観・勤労観を意識し、進路実現のための自己分析ができる。 グループワークを通じて、問題発見から問題解決までのプロセスを理解し実践することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
評価項目1	工学基礎力を高め、様々な工学分野の課題に対応するための基礎力を身につけることができる。			工学基礎力を高め、様々な工学分野の課題に挑戦することができる。		工学基礎力が不十分で、様々な工学分野の課題に挑戦することができない。	
評価項目2	自身の将来のライフプランや職業観・勤労観を意識し、進路実現のための自己分析ができる。			自身の将来のライフプランや職業観・勤労観を意識することができる。		自身の将来のライフプランや職業観・勤労観を意識できず、進路実現のための自己分析もできない。	
評価項目3	問題発見から問題解決までのプロセスを理解し実践することができる。			問題発見から問題解決までのプロセスを理解している。		問題発見から問題解決までのプロセスを理解せず、実践することもできない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	自身の専門分野にとどまらず、幅広い視点から問題解決のためのプロセスを立案し、チームワークによって実践する。 また、キャリア形成に必要な能力や態度を身に付ける。						
授業の進め方・方法	通常、実験等と演習等を毎週行う。 授業は基本的にグループ単位での演習や実験を行う。						
注意点	・ 学習にあたっては、自己のキャリアについて常に意識し、将来の進路選択を行う際の参考にすること。 ・ ICT活用能力を高めるため、Blackboardに解答する簡単な小テストやアンケートを課すことがある。 ・ 授業時間以外も活用してグループで調査研究や製作活動に取り組むことが必要となる項目もある。 ・ グループ学習では、自分の役割を見つけ、グループ活動に積極的に参加すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	ガイダンス キャリア教育 (キャリア・アンカー)		学習内容を把握する 自分の将来について考えられるように、キャリア・アンカーについて理解し、現時点でのキャリア・デザインを描けるようにする		
		2週	ドローンを用いたプログラミング演習 (1)		ドローンなど航空機の飛行原理について寮体工学的な観点より理解できる。		
		3週	ドローンを用いたプログラミング演習 (2)		繰り返し文を用いた基本的なプログラムのアルゴリズムについて理解できる。		
		4週	ドローンを用いたプログラミング演習 (3)		自系の専門知識・技能についての理解を深めることができる。		
		5週	ドローンを用いたプログラミング演習 (4)		自系の専門知識・技能についての理解を深めることができる。		
		6週	3D-CADを用いた作図演習 (1)		物体の形状を3平面から考えることができる。 3D-CADにおける作図手法について理解できる。		
		7週	3D-CADを用いた作図演習 (2)		物体の形状を3平面から考えることができる。 3D-CADにおける作図手法について理解できる。		
		8週	3D-CADを用いた作図演習 (3)		物体の形状を3平面から考えることができる。 3D-CADにおける作図手法について理解できる。		
	2ndQ	9週	3D-CADを用いた作図演習 (4)		物体の形状を3平面から考えることができる。 3D-CADにおける作図手法について理解できる。		
		10週	キャリア教育 (キャリアパス講演)		OBからの講演を聞き、職業に対するイメージを明確にする		
		11週	環境分析演習 (1)		環境分析手法に関する知識・手法について理解することができる。		
		12週	環境分析演習 (2)		環境分析手法に関する知識・手法について理解することができる。		
		13週	環境分析演習 (3)		環境分析手法に関する知識・手法について理解することができる。		
		14週	環境分析演習 (4)		環境分析手法に関する知識・手法について理解することができる。		
		15週	情報セキュリティ教育		インターネットを利用する上での様々な脅威を認識できる		
		16週					
後期	3rdQ	1週	ガイダンス 地域性学習 (1) アイスブレイク・テーマ説明		後期の学習内容について把握できる 与えられた課題内容について正しく理解できる。		
		2週	地域性学習 (2) チームビルディング研修		協働的な作業において、自身の役割を見つけ行動できる		

		3週	地域性学習（３） 情報共有・整理	事前に収集してきた情報を元に話し合うことができる。
		4週	地域性学習（４） グループディスカッション	与えられたテーマについて，解決するための道筋や方法を議論して，まとめることができる。
		5週	地域性学習（４） グループディスカッション	与えられたテーマについて，解決するための道筋や方法を議論して，まとめることができる。
		6週	地域性学習（５） 発表資料作成	グループの考えを適切なツールを用いてまとめることができる。
		7週	地域性学習 発表会	適切なツールや手法を用いて，論理的に自分達の考えを聞き手に伝えることができる。
		8週	P B L 学習（１） テーマ説明	課題内容に対して正しく理解できる。
	4thQ	9週	キャリア教育（ジョブトーク）	OB等のエンジニアに対するインタビューを通して，種々の仕事内容や社会人としての役割について知る
		10週	PBL 学習（２） グループディスカッション	グループ討議に主体的に参加できる。 アイデア創出手法・合意形成手法を理解し，実践できる。
		11週	PBL 学習（３） グループディスカッション	グループ討議に主体的に参加できる。 アイデア創出手法・合意形成手法を理解し，実践できる。
		12週	PBL 学習（４） 課題解決案の創成	様々な情報を分析・整理し，活用すべき情報を選択して課題解決案につなげることができる。
		13週	PBL 学習（５） 発表資料の作成	適切なツールや手法を用いて，聞き手に対して分かりやすい発表資料を作成することができる。
		14週	PBL 学習（６） 発表会	聞き手の理解を促す発表ができ，適切な質疑応答をすることができる。
		15週	授業の振り返り	これまでの創造工学の内容について取りまとめ，整理し理解を深める
		16週		

評価割合

	課題	発表	取組み	合計
総合評価割合	60	20	20	100
基礎的能力	20	10	5	35
専門的能力	20	0	5	25
分野横断的能力	20	10	10	40

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	分析化学Ⅲ
科目基礎情報						
科目番号	0015		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	履修単位: 1		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	3		
開設期	前期		週時間数	前期:2		
教科書/教材	本水 他共著「基礎教育シリーズ 分析化学 (基礎編)」 (東京教学社) /H.Freiser,Q.Fernando 著, 藤永太一郎, 関戸栄一共訳「イオン平衡」 (化学同人), Allen J.Bard 著, 松田好晴, 小倉興太郎共訳「溶液内イオン平衡」 - 理論と計算 - (化学同人), 日本分析化学会北海道支部・東北支部共編「分析化学反応の基礎」改訂版 (培風館)					
担当教員	奥田 弥生					
到達目標						
多塩基酸溶液pH 計算や弱酸溶液中の化学種の分率が計算できる。 対数濃度図を描いてpHを求めることができる。 炭酸塩鉱物等の溶解度とpH との関係を説明することができる。 副反応係数, 条件生成定数を用いて反応の進行の程度を予測する方法を理解できる。 キレート抽出系での金属イオンの分離の可能性を計算で推定できる。以上の知識を理解し, 実際の分析に応用できる能力を身につける。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1. 多塩基酸溶液pH 計算や弱酸溶液中の化学種の分率が計算できる。	より複雑な系で多塩基酸溶液pH 計算や弱酸溶液中の化学種の分率が計算できる。		多塩基酸溶液pH 計算や弱酸溶液中の化学種の分率が計算できる。		多塩基酸溶液pH 計算や弱酸溶液中の化学種の分率が計算できない。	
2. 対数濃度図を描いてpHを求めることができる。	より複雑な系で対数濃度図を描いてpHを求めることができる。		対数濃度図を描いてpHを求めることができる。		対数濃度図を描いてpHを求めることができない。	
3. 炭酸塩鉱物等の溶解度とpH との関係を説明することができる。	炭酸塩鉱物等の溶解度とpH との関係を詳細に説明することができる。		炭酸塩鉱物等の溶解度とpH との関係を説明することができる。		炭酸塩鉱物等の溶解度とpH との関係を説明することができない。	
4. 副反応係数, 条件生成定数を用いて反応の進行の程度を予測する方法を理解できる。	副反応係数, 条件生成定数を用いて反応の進行の程度を予測する方法を理解できる。		副反応係数, 条件生成定数を用いて反応の進行の程度を予測する方法の基本を理解できる。		副反応係数, 条件生成定数を用いて反応の進行の程度を予測する方法を理解できない。	
5. キレート抽出系での金属イオンの分離の可能性を計算で推定できる。	より複雑なキレート抽出系での金属イオンの分離の可能性を計算で推定できる。		キレート抽出系での金属イオンの分離の可能性を計算で推定できる。		キレート抽出系での金属イオンの分離の可能性を計算で推定できない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	二塩基酸溶液のpH 計算, 弱酸や錯体を含む溶液の対数濃度図の作図等を通して, 比較的複雑な系について, 化学平衡論にもとづく解析法を身につけさせる。条件生成定数を用いて反応前後の物質量的変化を推算する方法を解説する。また錯形成反応の応用例としてキレート系溶媒抽出による分離について解説する。					
授業の進め方・方法	授業は教員による説明と演習, 授業内容の理解度を確認する小テスト (複数回) で構成する。概ね教科書に沿って進行するので, シラバスを参考にして予習すること。電卓, 定規, テンプレートおよびA4判グラフ用紙を用意すること。成績は到達目標に関する小テスト40%, 定期試験40%および課題20%で評価する。合格点は60点である。成績評価が60点に満たないものについては再試験を行うことがある。再試験の点数は小テストおよび定期試験による評価部分の差し替えのみに用いる。					
注意点	分析化学Ⅰ・Ⅱで習得した知識が基礎となる。必要に応じて分析化学Ⅰ・Ⅱのノートを読み返すとよい。授業で配布される演習課題や教科書の章末問題により予習・復習を行い自学自習に取り組むこと。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	酸・塩基平衡-より複雑な系-種々の酸・塩基の定義と相互の関係		Lewis の定義により物質を酸・塩基等に分類できる。	
		2週	弱二塩基酸溶液の濃度計算法		弱二塩基酸溶液のpH を計算で求められる。	
		3週	分布図, 対数濃度図 分率 (a) の定義と計算		酸溶液中の化学種の分率が計算できプロトン均衡式を書ける。	
		4週	弱酸のavs.pH と対数濃度図の作成と応用		酸や塩溶液のavs.pH図, 対数濃度図を描ける。対数濃度図から溶液のpH を求めることができる。	
		5週	多塩基酸のa vs.pH 図と対数濃度図の作成 (1)		多塩基酸のa vs.pH図, 対数濃度図を描ける。	
		6週	多塩基酸のa vs.pH 図と対数濃度図の作成 (2)		多塩基酸のa vs.pH図, 対数濃度図を描ける。	
		7週	沈殿平衡 溶解度に及ぼすpH の影響		溶解度に対する水素イオン濃度の影響を説明できる。	
		8週	炭酸カルシウムの溶解度とpH の関係		炭酸塩の溶解度を水素イオン濃度の関数で表せる。	
	2ndQ	9週	炭酸カルシウムの溶解度曲線の作成		炭酸塩の溶解度曲線を描くことができる。炭酸塩の溶解度が炭酸イオンの分率の逆数に比例することを示すことができる。	
		10週	錯形成平衡 錯形成平衡における分布図の作成		錯形成平衡の分布図を描ける。	
		11週	条件生成定数と副反応係数		熱力学的生成定数と条件生成定数の違いを説明できる。 副反応係数を定義し, 関係する諸定数で表すことができる。	
		12週	EDTA の副反応係数vs.pH 図の作成		副反応係数vs.pH 図を作成できる。また副反応係数を用いて反応の進行の程度を予測できる。	
		13週	分配平衡 分配則, 分配定数, 分配比		分配則を理解し分配定数, 分配比の定義が分かる。 ある系について分配定数, 分配比を書き表すことができる。	

		14週	キレート系溶媒抽出	キレート系溶媒抽出の平衡定数（抽出定数）を分配定数，生成定数，酸解離定数で表すことができる。抽出定数の値から実用的な分離が可能となる抽出回数を求めることができる。抽出定数の値から実用的な分離が可能となる抽出回数を求めることができる。
		15週	抽出曲線の作成 抽出挙動の解析	分配比と抽出率の関係が分かる。分離係数と分配比の関係を表せる。抽出定数から複数成分の分離の可能性を推定できる。
		16週	定期試験	

評価割合

	定期試験	小テスト	課題	合計
総合評価割合	40	40	20	100
基礎的能力	40	40	20	100
専門的能力	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	学外実習
科目基礎情報						
科目番号	0026		科目区分	専門 / 選択		
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 1		
開設学科	創造工学科（応用化学・生物系共通科目）		対象学年	4		
開設期	通年		週時間数	0.5		
教科書/教材	教科書：なし／参考図書：なし					
担当教員	平野 博人					
到達目標						
1.工学実験技術について(適切な方法により実験や計測を行い、結果をまとめることができる。) 2.技術者倫理について(関連する法令を遵守し、技術者としての社会的責任を理解できる。) 3.情報リテラシーについて(セキュリティに配慮して情報技術を活用し、アルゴリズムを考え実装できる。) 4.汎用的技能について(相手の考えや意見を理解し、それに対する自己の意見を正しく伝えとともに、課題を発見し計画的・論理的に課題を解決できる。) 5.態度・志向性について(目標をもち自律・協調した行動ができる。) 6.総合的な学習経験と創造的思考力について(課題を理解し、課題解決のための要素やシステム・工程等を創出できる。)						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
工学実験技術について	適切な方法により実験や計測を行い、結果を客観的に分かりやすくまとめることができる。		適切な方法により実験や計測を行い、結果をまとめることができる。		適切な方法により実験や計測を行うことができず、結果をまとめることができない。	
技術者倫理について	関連する法令を遵守し、技術者としての社会的責任を深く理解できる。		関連する法令を遵守し、技術者としての社会的責任を理解できる。		関連する法令を遵守せず、技術者としての社会的責任を理解できない。	
情報リテラシーについて	セキュリティに配慮して情報技術を活用し、複数のアルゴリズムを考え実装できる。		セキュリティに配慮して情報技術を活用し、アルゴリズムを考え実装できる。		セキュリティに配慮して情報技術を活用できず、アルゴリズムを考え実装できない。	
汎用的技能について	相手の考えや意見を深く理解し、それに対する自己の意見を正しく分かりやすく伝えとともに、課題を発見し計画的・論理的に課題を解決できる。		相手の考えや意見を理解し、それに対する自己の意見を正しく伝えとともに、課題を発見し計画的・論理的に課題を解決できる。		相手の考えや意見を理解できず、それに対する自己の意見を正しく伝えられず、課題を発見し計画的・論理的に課題を解決できない。	
態度・志向性について	目標をもち続け、自律・協調した行動ができる。		目標をもち自律・協調した行動ができる。		目標をもち自律・協調した行動ができない。	
総合的な学習経験と創造的思考力について	課題を深く理解し、課題解決のための要素やシステム・工程等を複数案創出できる。		課題を理解し、課題解決のための要素やシステム・工程等を創出できる。		課題を理解できず、課題解決のための要素やシステム・工程等を創出できない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	企業、国または地方公共団体等の機関において、その機関が計画する研究開発に関する研修および技術講習を含む生産過程等の実習を行う。 実習を通して、 1) 社会が求めている技術や専門の実践技術に関する知識の把握 2) 技術者が社会に対して負っている責任の理解 3) コミュニケーション能力の育成 4) 報告書作成や報告会に関して計画的に推進する能力の習得などを目的とする。					
授業の進め方・方法	企業、国または地方公共団体の機関において、実習機関の計画する研究開発に関する研修および技術講習を含む生産過程等の実習を行う。実施方法は、夏季休業期間中における集中実習とし、担当教員が事前指導、事後指導および評価を担当する。達成目標に関して、評価の観点（実習の目的を十分に理解し、それを明確に説明できるか。実習内容と、本校における学習との関連を理解し、説明できるか。実習での体験・成果を的確に報告書にまとめることが出来るか。適切な資料を作成して実習の成果をプレゼンテーションすることができるか。責任感・研鑽努力・協調性・意欲・周囲との融和等をもって研修を実施できるか。）に基づいて評価する。学外実習報告書を担当教員が100点法で評価する。学外実習報告会の評価は各教員により100点法で行い平均する。さらに実習機関から提出された「学外実習評定書」の評価を100点法に換算する。これらを平均して評価点とする。合格点は60点である。					
注意点	・実習受入れ先は、掲示等にて順次連絡するとともに、希望者を募集する。 ・実習に必要な経費は、原則自己負担であること、また、実習受入れ先によっては申し込み時に書類選考があることに注意すること。 ・受け入れ先決定後、実習に必要な情報などを事前に調査しておくこと。 ・学外実習者は、必ず傷害保険に加入すること。 ・学外実習参加希望者は、受入れ先の選定、事務手続き、報告書の提出など、全般について担当教員の指導を受け、最後まで自覚と責任を持って対応すること。 ・実習に当たっては、実習受入れ先の規律・規則・指導に従い、積極的に取り組み、コミュニケーションに努めるとともに、実習時間外であっても期間中は責任ある行動を心がけること。 ・実習終了後に実習報告書の提出と報告会があることを念頭において実習に取り組むこと。					
授業計画						
		週	授業内容	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	学外実習説明会、特にその意義と目的	学外実習と普段の授業との関係について理解する。		
		2週	学外実習先の選択	専門および周辺分野に関連する企業または大学のテーマについて検討し、得られる成果について予測できる。		
		3週	学外実習先の選択	専門および周辺分野に関連する企業または大学のテーマについて検討し、得られる成果について予測できる。		
		4週	学外実習先の選択	専門および周辺分野に関連する企業または大学のテーマについて検討し、得られる成果について予測できる。		
		5週	事前学習	実習先において必要と思われる、知識や技術について調査できる。		

		6週	事前学習	実習先において必要と思われる、知識や技術について調査できる。
		7週	事前学習	実習先において必要と思われる、知識や技術について調査できる。
		8週	事前学習	実習先において必要と思われる、知識や技術について調査できる。
	2ndQ	9週	ビジネスマナーについて(1)	実習先において必要と思われる、適切な言葉遣いを習得する。
		10週	ビジネスマナーについて(2)	実習先において必要と思われる、行動規範(情報の取り扱い等)を習得する。
		11週	実習(1)	選択した実習先のテーマ毎に定められた課題を遂行する。
		12週	実習(2)	選択した実習先のテーマ毎に定められた課題を遂行する。
		13週	報告会の準備(1)	発表会に提出する要項やプレゼンテーション資料を作成できる。成してプレゼンテーションすることができる。
		14週	報告会の準備(2)	発表会に提出する要項やプレゼンテーション資料を作成できる。
		15週	学外実習報告会	選択したテーマに関する現況と問題点を、報告書やプレゼンテーションを通じて他者に説明できる。
		16週		
後期	3rdQ	1週		
		2週		
		3週		
		4週		
		5週		
		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		

評価割合				
	学外実習報告書	学外実習評定書	学外実習報告会	合計
総合評価割合	34	33	33	100
実習目的の理解度	11	0	0	11
学習した内容との関連付け	11	0	0	11
プレゼンテーション能力	0	11	33	44
責任感・協調性等	0	11	0	11
的確な表現能力	12	0	0	12
積極性	0	11	0	11

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	ビジネス I	
科目基礎情報							
科目番号		0027		科目区分		専門 / 選択	
授業形態		授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科		創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		4	
開設期		前期		週時間数		2	
教科書/教材		図解でわかる経営の基本 いちばん最初に読む本					
担当教員		須田 孝徳					
到達目標							
1. 企業経営の管理業務に関する全般的な基礎知識について説明できる。 2. 経営資源であるヒト、モノ、カネ、情報、技術の管理法について説明できる。 3. 生産における管理法について説明できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)	
企業経営の管理業務に関する全般的な基礎知識について		企業経営の管理業務に関する全般的な基礎事項について、歴史的観点についても説明でき、経営モデルに適應できる。		企業経営の管理業務に関する全般的な基礎事項について理解し、説明できる。		左記項目に関することができない。	
経営資源であるヒト、モノ、カネ、情報、技術の管理法		経営資源であるヒト、モノ、カネ、情報、技術の管理法について理解し、経営モデルに適應できる。		経営資源であるヒト、モノ、カネ、情報、技術の管理法について理解し、説明できる。		左記項目に関することができない。	
生産における管理法について		生産における管理法の全般的な基礎事項について理解し、説明でき、経営モデルに適應できる。		生産における管理法の全般的な基礎事項について理解し、説明できる。		左記項目に関することができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		企業経営の管理業務に関する全般的な基礎知識を習得する。特に、経営資源であるヒト、モノ、カネ、情報、技術の管理法について理解する。また、生産管理に関する基本的事項についても理解する。					
授業の進め方・方法		経営をはじめて学ぶ学生のために、初歩的な教科書を指定した。この教科書と教員自作のレジュメを用いて講義する。また、単元ごとに演習課題を用意し、実践性を高めるようにする。					
注意点		演習課題には積極的に自発的に取り組むこと。演習問題は添削後、返却する。					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	0. フロンティアコースで学ぶビジネス I～Ⅲの関係と本授業の位置づけ 1. 経営の基本管理		・企業等経営に関する授業のビジネスⅠ～Ⅲのなかで、本授業の位置づけについて理解し、説明できる。 ・マネジメント・サイクル、期間別経営計画、意思決定の階層構造とプロセスについて説明できる。		
		2週	2. 経営の組織管理 2－1. 組織の形態 2－2. 組織の構成原理 2－3. 組織の運営		①代表的な組織形態、②組織の構成原理としてコミュニケーション、分業・専門化と調整、権限と責任、③組織の運営として、意思決定システム、モチベーション（マズローの欲求段階説など）について説明できる。		
		3週	2－4. マネジメント思想の流れ		人や組織を理解するうえで必要なマネジメント思想について学ぶ。具体的には、テーラーの科学的管理法、フォードの管理論、人間関係論、動機付け理論等について概要を説明できる。		
		4週	3. 人財の管理		①雇用管理として、採用、配置、人事異動・昇進、資格制度、②能力開発として、教育訓練・能力開発の種類（階層・目的）、③能力開発の方法として、OJT、Off-JT、自己啓発、④賃金管理として、賃金体系、基本給類型の体系、職務評価方法、⑤経営戦略と人的資源管理の適合性について概要を説明できる。		
		5週	4. 会計の基礎 4－1. 企業会計の基礎		損益計算書、貸借対照表などの財務諸表の基本的事項について説明できる。		
		6週	4－2. 原価計算 4－3. 経営分析		①原価概念、原価計算の種類と方法および②経営比率分析、損益分岐点分析、利益増減分析の基本的事項について説明できる。		
		7週	4－4. 資金調達の形態		内部金融と外部金融、直接金融と間接金融、自己資本と他人資本の基本事項について説明できる。		
		8週	これまでのまとめと到達度確認試験				
	2ndQ	9週	5. 生産管理 5－1. 生産管理の体系 5－2. 生産形態と方式		生産管理の体系と生産形式の基本事項について説明できる。		
		10週	5－3. 品質管理		統計的品質管理、QC7つ道具などの基本事項について説明できる。		
		11週	5－4. 原価管理 5－5. 工程管理		①原価管理として、目標利益と原価の関係、VEなど、②工程管理として、各種日程計画、進度管理、生産リードタイムなど、の基本事項について説明できる。		
		12週	5－6. 資材管理 5－7. 設備管理		①資材管理として、資材の種類、資材計画、MRPシステム、購買管理、外注管理、在庫管理と発注方式、②TPM（総合的生産設備）、設備投資計画、の基本事項について説明できる。		

		13週	5－8．労務管理 5－9．作業管理	①生産管理の中での労務管理の位置づけ，②作業管理として，作業研究，作業分析，作業改善などの基本事項について説明できる。
		14週	6．北海道の企業	北海道の企業について，具体的な事例を数社解説する。これにより北海道の経営環境の基本事項について説明できる。
		15週	7．スタートアップと地域	スタートアップとベンチャー企業の違いやスタートアップが地域においてどのような役割を示すかを説明できる。
		16週	期末試験	

評価割合

	定期試験	達成度確認	課題	合計
総合評価割合	0	0	0	0
基礎的能力	1 0	1 0	0	0
専門的能力	4 0	4 0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	無機化学Ⅲ	
科目基礎情報							
科目番号	0028		科目区分		専門 / 必修		
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		4		
開設期	前期		週時間数		2		
教科書/教材							
担当教員	古崎 毅						
到達目標							
1. 状態図より相の存在比や相の成分比を計算できる。 2. バンドモデルを使って金属 (導体) ・半導体・絶縁体の電気伝導性を説明できる。 3. 不純物半導体の作製方法を説明できる。 4. 不純物半導体を使った素子の特性発現原理を説明できる。 5. 強誘電の圧電性・焦電性等の特性を説明できる。 6. スネルの法則を使って, 全反射を説明できる。 7. 格子振動および自習電子による熱伝導を説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
1. 状態図より相の存在比や相の成分比を計算できる。	状態図より相の存在比や相の成分比を計算できる。		状態図より相の存在比や相の成分比の基本的な計算ができる		状態図より相の存在比や相の成分比を計算できない。		
2. バンドモデルを使って金属 (導体) ・半導体・絶縁体の電気伝導性を説明できる。	バンドモデルを使って金属 (導体) ・半導体・絶縁体の電気伝導性を説明できる。		バンドモデルを使って金属 (導体) ・半導体・絶縁体の電気伝導性の基本的な説明ができる。		バンドモデルを使って金属 (導体) ・半導体・絶縁体の電気伝導性を説明できない。		
3. 不純物半導体の作製方法を説明できる。	不純物半導体の作製方法を説明できる。		不純物半導体の作製方法の基本的な説明ができる。		不純物半導体の作製方法を説明できない。		
4. 不純物半導体を使った素子の特性発現原理を説明できる。	不純物半導体を使った素子の特性発現原理を説明できる。		不純物半導体を使った素子の特性発現原理の基本的な説明ができる。		不純物半導体を使った素子の特性発現原理を説明できない。		
5. 強誘電の圧電性・焦電性等の特性を説明できる。	強誘電の圧電性・焦電性等の特性を説明できる。		強誘電の圧電性・焦電性等の特性の基本的な説明ができる。		強誘電の圧電性・焦電性等の特性を説明できない。		
6. スネルの法則を使って, 全反射を説明できる。	スネルの法則を使って, 全反射を説明できる。		スネルの法則を使って, 全反射の基本的な説明ができる。		スネルの法則を使って, 全反射を説明できない。		
7. 格子振動および自習電子による熱伝導を説明できる。	格子振動および自習電子による熱伝導を説明できる。		格子振動および自習電子による熱伝導の基本的な説明ができる。		格子振動および自習電子による熱伝導を説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	無機材料を合成する上で必要な状態図の基礎的な知識, 及び無機材料を主たる対象として電氣的・光学的・熱的特性を教授する。						
授業の進め方・方法	講義は座学方式で行い, 演習および課題を課す事により理解を深めるようにする。課題は添削後, 目標が達成されていることを確認し, 返却する。到達目標を達成できているかどうかを試験及び課題により総合評価する (中間時期の達成度確認40%, 定期試験45%, 及び課題15%の割合)。合格点は60点である。成績評価が40点以上60点に満たない学生については再試験を行うことがあり, 試験分 (85%) の再評価をするものとする。なお, 再試験を受けた学生の評価点は60点を越えないものとする。						
注意点	この科目は学修単位科目のため, 60時間の自学自習を必要とする。授業で課される演習・課題に自学自習により取り組むこと。提出された演習・課題は目標が達成されていることを確認し添削して返却する。目標が達成されていない場合には再提出を求める。講義時には, ノート, 筆記用具, 定規を持参すること。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	状態図 (1) : 一成分系状態図		一成分系の状態図の意味する事を説明できる。		
		2週	状態図 (2) : てこの原理と二成分系状態図 (溶融混合物 (共晶))		溶融混合物 (共晶) の状態図から, 相の存在比を計算できる。		
		3週	状態図 (3) : 全域固溶体と制限固溶体の状態図		全域固溶体と制限固溶体の状態図から, 相の存在比および各相の成分比を計算できる。		
		4週	状態図 (4) : 安定溶融混合物と分解溶融混合物の状態図		安定溶融化合物と分解溶融化合物のそれぞれの状態図を見て結晶育成の可能性を判断できる。		
		5週	物質の電氣的性質 (1) : 金属・半導体・絶縁体のバンドモデル		バンドモデルを使って金属 (導体) , 半導体および絶縁体の電気伝導性の違いを説明できる。		
		6週	物質の電氣的性質 (2) : 真性半導体と不純物半導体 (n型, p型)		バンドモデルを使って真性半導体と不純物半導体の電気伝導性の違いを説明できる。また, 不純物半導体の作製方法を説明できる。		
		7週	物質の電氣的性質 (3) : ゼーベック効果, ホール効果		不純物半導体におけるゼーベック効果やホール効果を説明できる。		
		8週	物質の電氣的性質 (4) : p-n接合, トランジスタ		n型およびp型の不純物半導体を使った素子の特性発現の原理を説明できる。		
	2ndQ	9週	物質の電氣的性質 (5) : 強誘電体の履歴曲線 (ヒステリシスループ)		強誘電体の分極率 - 電圧の関係を説明できる。		
		10週	物質の電氣的性質 (6) : 圧電性・逆圧電性・焦電性		圧電性, 逆圧電性, 焦電性がどのような特性なのかを説明できる。		
		11週	物質の光学的性質 (1) : 屈折, スネルの法則		屈折が起こる原理を説明できる。屈折がスネルの法則によって生じていることを説明できる。		
		12週	物質の光学的性質 (2) : 全反射, 複屈折		スネルの法則を用いて全反射を説明できる。		
		13週	物質の熱的性質 (1) : 熱膨張		熱膨張は何故起こるのかを説明できる。		
		14週	物質の熱的性質 (2) : 格子振動による熱伝導		格子振動による熱伝導を説明できる		

		15週	物質の熱的性質（３）：自由電子による熱伝導	自由電子による熱伝導を説明できる。	
		16週	定期試験		
評価割合					
		中間時期の達成度確認	定期試験	課題・小テスト	合計
総合評価割合		40	45	15	100
基礎的能力		40	45	15	100
専門的能力		0	0	0	0
分野横断的能力		0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	有機化学Ⅲ	
科目基礎情報							
科目番号		0029		科目区分	専門 / 必修		
授業形態		授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科		創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	4		
開設期		前期		週時間数	2		
教科書/教材		John McMurry著, 伊東楓, 児玉三明訳「マクマリー有機化学概説 (第7版) 東京化学同人, 西村 淳, 樋口弘行, 大和武彦 共著, 「有機合成化学入門 - 基礎を理解して実践に備える」丸善株式会社/K. P. C. Vollhardt 他著, 古賀憲司他監訳「ボルハルト・ショアー現代有機化学 (上・下)」 (第3版)」化学同人, 吉原正邦他著「有機化学演習」三共出版, 稲本直樹著「反応論による有機化学」実教出版株式会社, J. McMurry 著, 伊東他訳「マクマリー有機化学 (上・中・下)」 (第3版)」東京化学同人, R. T. Morrison, R. N. Boyd 著, 中西他訳「モリソン・ボイド有機化学 (上・中・下) (第6版)」東京化学同人, 鈴木仁美著, 梅澤喜夫・大野公一・竹内敬人編, 「化学入門コース5 有機合成化学」岩波書店, その他有機化学関連の参考書					
担当教員		橋本 久穂					
到達目標							
有機化学Ⅰ, Ⅱに引き続き, カルボン酸とその誘導体ならびにアミンの命名法, 製法と反応を説明できる. 有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できる. 有機合成化学を包括的に理解して整理し, 簡単な化合物について反応経路の分析と設計を実行し, その技術を実践できる能力を身につける.							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)	
到達目標1		カルボン酸およびその誘導体の製法・反応について例示し, 説明できる.		カルボン酸およびその誘導体の製法・反応について例示し, 概ね説明できる.		カルボン酸およびその誘導体の製法・反応について例示し, 説明できない.	
到達目標2		アミンの命名・製法・反応について説明できる.		アミンの命名・製法・反応について概ね説明できる.		アミンの命名・製法・反応について説明できない.	
到達目標3		有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できる.		有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について概ね例示できる.		有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できない.	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		この講義では, 有機化学Ⅰ, Ⅱに引き続き, カルボン酸とその誘導体, アミンの命名法, 製法と反応を学んだ後, カルボニル化合物の重要な反応を学習する. そして再度, 有機化学の要点を俯瞰的に復習したうえで, 逆合成の視点から天然物の全合成を概観し, さらに最近注目されている有機機能物質や構造的に興味深い有機化合物の合成について教授する.					
授業の進め方・方法		次回講義の授業項目をシラバスで確認して, 該当項目を教科書で予習すること. また, 授業項目毎に演習課題を出すので, それをもとに自学自習により取り組むこと. 演習課題は採点后, 返却する. 長期休業中にレポートの作成を求める. レポートは添削・採点后に返却する. 定期試験では, 達成目標に挙げた知識と能力が身につけていることを, 社会的に要求される水準 (国際的な水準) 以上の内容の問題の出題に十分に配慮した, 試験で達成度評価を行う. 学習目標に関する内容の定期試験, 中間試験, 上記の演習課題とレポートにより総合評価する (定期試験 60%, 中間試験 30%, 演習課題・レポート 10%). 合格点は 60 点である. 成績評価が 60 点未満の場合は再試験 (全授業項目を出題範囲とする) を実施することがある. ただし, 再試験の得点は上記の定期試験と中間試験の占める割合 (90%) までとし, 再試験を受けた者の成績評価は 60 点を超えないものとする.					
注意点		受講にあたってはノート, 筆記用具, 電卓・定規を準備すること. 自学自習時間として, 日常の授業のための予習復習時間, 理解を深めるための演習課題・レポート, および各試験の準備のための勉強時間を総合したものとする. 自学自習時間として60時間必要である.					
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	カルボン酸の合成と反応 (10章)		カルボン酸の代表的な製法を説明できる.		
		2週	カルボン酸の反応		カルボン酸の代表的な反応を説明できる.		
		3週	カルボン酸誘導体の合成と反応		カルボン酸誘導体の代表的な製法を説明できる.		
		4週	カルボン酸誘導体の反応		カルボン酸誘導体の代表的な反応を説明できる.		
		5週	カルボニル化合物のα置換反応と縮合反応 (11章)		ケトーエノール互変異性を例示し, 説明できる.		
		6週	カルボニル化合物のα置換反応		カルボニル化合物の代表的なα置換反応を説明できる.		
		7週	カルボニル化合物の縮合反応		アルドール反応, Claisen縮合反応を説明できる.		
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	アミン (12章) 命名法と性質		アミンを命名し, 塩基性を説明できる.		
		10週	アミン 製法		アミンの代表的な製法を例示できる.		
		11週	アミン 反応		アミンの代表的な反応を例示できる.		
		12週	有機合成 反応 (戦術) の要点		有機合成の反応の要点を基にした合成スキームについて説明できる.		
		13週	有機合成 合成計画 (戦略) の要点		有機合成の反応の要点と合成計画, それらを基にした合成スキームについて説明できる.		
		14週	合成スキームの最適化		有機合成の反応の要点と合成計画, それらを基にした合成スキームについて説明できる.		
		15週	天然物		医薬品の製造と関係が深い天然物の合成, 現在社会を支える有機機能物質関連の合成を概観し, この考え方を他の有機化合物へ応用できる.		
		16週					
評価割合							
		中間試験		定期試験		課題・レポート	合計

総合評価割合	30	60	10	100
基礎的能力	0	0	0	0
専門的能力	30	60	10	100

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	物理化学Ⅱ	
科目基礎情報							
科目番号	0030			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	4		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	教科書： 福地賢治著 「物理化学」 実教出版 / 教材： 1) P.W.Atkins著 千原秀昭・中村巨男訳「アトキンス 物理化学 第6版」東京化学同人, 2) David W.Ball著 田中一義・阿竹徹監訳「ボール 物理化学」化学同人, 3) W.J.Moore著 細矢治夫・湯田坂雅子訳「ムーア 基礎物理化学」東京化学同人, 4) D.A.McQuarrie, J.D.Simon著 千原英昭・齊藤一弥・江口太郎訳「物理化学－分子論的アプローチ」東京化学同人, 5) 米山宏著「電気化学」大日本図書.						
担当教員	甲野 裕之						
到達目標							
1) ギブズエネルギーに基づく化学平衡を理解し、その平衡移動に関してルシャトリエの法則に従い説明できること。 2) 状態図を理解し、その平衡状態を説明できること。さらに束一的性質から溶液の分子量等を算出できること。 3) 反応速度論を理解した上で、反応次数や速度定数を計算により決定できること。 4) 核反応による放射線の種類を理解し、半減期から安定性を説明できること。 5) 電池反応について各電極における酸化・還元反応を理解し、ネルンストの式に基づいて起電力を求めることができること。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
化学平衡について理解し、ギブズエネルギーと平衡定数を求めることができる。		化学平衡について理解し、ギブズエネルギーと平衡定数を求めることができる。		化学平衡の基本的な事項について理解し、ギブズエネルギーと平衡定数を求めることができる。		化学平衡について理解できない。ギブズエネルギーと平衡定数を求めることができない。	
状態図を理解し、その平衡状態を説明できること。さらに束一的性質から溶液の分子量等を算出できること。		状態図を理解し、その平衡状態を説明できる。さらに束一的性質から溶液の分子量等を算出できる。		状態図を理解し、その平衡状態を説明できる。さらに束一的性質を説明できる。		状態図を理解し、その平衡状態を説明できない。さらに束一的性質を説明できない。	
反応速度論を理解し、反応次数や速度定数を計算できること。		反応速度論を理解し、反応次数や速度定数を計算できる。		反応速度論を理解し、速度定数を計算できる。		反応速度論を理解できない。速度定数を計算できない。	
核反応による放射線の種類を理解し、半減期から安定性を説明できること。		核反応による放射線の種類を理解し、半減期から安定性を説明できる。		核反応による放射線の種類を理解し、半減期を計算できる。		核反応による放射線の種類を理解できない。半減期を計算できない。	
電池反応における各電極における酸化・還元反応を理解し、ネルンストの式に基づいて起電力を求めることができること。		電池反応における各電極における酸化・還元反応を理解し、ネルンストの式に基づいて起電力を求めることができる。		電池反応における各電極における酸化・還元反応を理解し、起電力を求めることができる。		電池反応における各電極における酸化・還元反応を理解できない。起電力を求めることができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要		物理化学における「化学平衡」、「状態図」、「反応速度」、「核化学」、「電池」についてその基本的概念を教授し、演習等を通して理解を深める。 ※実務との関係 この科目は企業で分析機器とその応用開発を担当していた教員が、その経験を活かし、各種分析手法の基礎となる物理化学について講義形式で授業を行うものである。					
授業の進め方・方法		「物理化学Ⅰ」で学習した熱力学に関する知識を基礎として、発展かつ実践的な内容について説明する。主に座学形式で実施し、適宜演習と課題により、その内容の理解度を高める。講義前には教科書の該当部分を予習し、授業終了後には学習内容について復習を心がけること。講義時にはノート、筆記用具、関数電卓を持参すること。ルーブリックへの評価は評価割合に従って決定する。 この科目は学修単位科目のため、事前・事後学習としてレポートを実施します。					
注意点		評価が60点に満たない者については再試験を実施する場合があるが、再試験受験者の評価は60点を越えないものとする。 受講者は継続的な自学自習を行い、学習内容の理解に務めること。					
授業計画							
		週	授業内容			週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	化学平衡 (1) ～平衡定数			平衡定数を求めることができる。	
		2週	化学平衡 (2) ～平衡定数と諸条件の影響			各種諸条件下での平衡定数を求めることができる。	
		3週	化学平衡 (3) ～平衡定数とルシャトリエの原理			ルシャトリエの原理を説明できる。	
		4週	化学平衡 (4) ～均一系と不均一系の化学平衡			均一系と不均一系での化学平衡の違いを明らかにできる。	
		5週	相図と状態図 (1) ～相図とギブズの相律			状態図から気液平衡を説明できる。	
		6週	相図と状態図 (2) ～相図とギブズの相律			相律の定義を理解し、平衡状態を説明できる。	
		7週	相図と状態図 (3) ～束一的性質			束一的性質を理解し、沸点上昇・凝固点降下、浸透圧に関して溶質の分子量を計算できる。	
		8週	反応速度論 (1) ～反応速度の定義			反応速度の定義を理解できる。	
	4thQ	9週	反応速度論 (2) ～反応次数とその特徴			反応速度定数と反応次数を計算から求めることができる。	
		10週	反応速度論 (3) ～アレニウスの式			アレニウスの式より反応速度を計算することができる。	
		11週	放射線の種類と特徴 (1) ～放射線の種類と半減期			各種放射線の特徴を理解し、その半減期を求めることができる。	
		12週	放射線の種類と特徴 (2) ～核分裂と核融合			核分裂と核融合について説明できる。	
		13週	電気化学 (1) ～ネルンストの式と起電力			ネルンストの式を用いて起電力を計算できる。	
		14週	電気化学 (2) ～平衡定数とネルンストの式			電池反応の起電力、平衡定数、自由エネルギーについて計算できる。	
		15週	電気化学 (3) ～電池反応と電気分解			電気分解について説明できる。実用電池の種類と特徴について説明できる。	

		16週	定期試験	
評価割合				
	中間試験	定期試験	レポート	合計
総合評価割合	40	40	20	100
基礎的能力	30	30	15	75
専門的能力	10	10	5	25
分野横断的能力	0	0	0	0

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	生化学Ⅱ
科目基礎情報						
科目番号	0031		科目区分		専門 / 必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		4	
開設期	前期		週時間数		2	
教科書/教材	教科書: ホートン生化学 第5版 鈴木紘一・笠井献一 他訳 東京化学同人/参考図書: 浜島 晃著「ニューステージ 新生物図表 生物基礎+生物対応」(株)浜島書店, コーン・スタンプ著 八木達彦・田宮信雄訳「コーンスタンプ生化学」東京化学同人, OUTLINES OF BIOCHEMISTRY Fifth Edition E.E.Conn et. al.1987					
担当教員	藤田 彩華					
到達目標						
1)代謝に関わるオルガネラの機能について説明することができる。 2)生物細胞内で行われているエネルギー生産のための異化代謝について説明することができる。 3)生物細胞内で行われている貯蔵・蓄積のための同化代謝について説明することができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
1)代謝に関わるオルガネラの機能について説明することができる。	1)代謝に関わるオルガネラの機能について説明できる。		1)代謝に関わるオルガネラの機能についての基礎的な説明ができる。		1)代謝に関わるオルガネラの機能について基礎的な説明ができない。	
2)生物細胞内で行われているエネルギー生産のための異化代謝について説明することができる。	2)生物細胞内で行われているエネルギー生産のための異化代謝について説明できる。		2)生物細胞内で行われているエネルギー生産のための異化代謝について基礎的な説明ができる。		2)生物細胞内で行われているエネルギー生産のための異化代謝について基礎的な説明ができない。	
3)生物細胞内で行われている貯蔵・蓄積のための同化代謝について説明することができる。	3)生物細胞内で行われている貯蔵・蓄積のための同化代謝について説明できる。		3)生物細胞内で行われている貯蔵・蓄積のための同化代謝について基礎的な説明ができる。		3)生物細胞内で行われている貯蔵・蓄積のための同化代謝について基礎的な説明ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	細胞小器官の役割, 炭水化物代謝, ATP生産, 光合成, 脂質代謝, 窒素代謝など生命現象の発現に関わる多くの化学反応である生体内代謝について教授する。					
授業の進め方・方法	・講義は座学方式で行い, 適宜, 課題を課すことにより理解を深め, 知識定着の状況を点検する。 ・学習達成目標を達成できているかどうかを, 中間試験, 定期試験及び課題により総合評価する (中間試験40%, 定期試験40%, 課題20%の割合)。合格点は60点である。 ・再試験は, 学業成績の評価点が40点以上60点未満の者を対象として行うことがあり, 試験分(80%分)の再評価をするものとする。再試験を受けた学生の成績評価は60点を超えないものとする。 ・この科目は学修単位科目のため, 事前・事後学習として課題レポートの提出を求める。					
注意点	・生物学および生化学Iで習得した知識が基礎となるので, 関連科目を復習し講義に臨むこと。図書館やインターネットを活用して関連事項を参照したり, 自学自習に取り組むこと (30時間以上の自学自習を必要とする)。 ・講義を聴き, きちんとノートを取ること。なお, 講義の理解を深めるためにプリントは適宜配布する。 ・授業中もしくは授業外での課題に取り組むこと。 ・講義時には, ノートを準備すること (配布したプリントをまとめるファイルを用意するとよい) 。					
授業計画						
前期	1stQ	週	授業内容		週ごとの到達目標	
		1週	細胞内小器官の役割		代謝に関わるオルガネラの機能について説明できる。	
		2週	代謝とは(異化と同化)		異化代謝と同化代謝について説明できる。	
		3週	呼吸(内呼吸と外呼吸)		生物学における呼吸を分子レベルで説明できる。	
		4週	解糖系(EMP経路, ED経路, ペントースリン酸経路)		生体内の糖代謝系(EMP経路, ED経路, ペントースリン酸経路)について説明できる。	
		5週	その他の糖代謝と糖新生系		生体内における糖新生系について説明できる。	
		6週	TCA回路		TCA回路について説明できる。	
		7週	電子伝達系と酸化的リン酸化		電子伝達系と酸化的リン酸化について説明できる。	
		8週	中間試験			
	2ndQ	9週	光合成(明反応と光合成色素)		光合成(明反応と光合成色素)について説明できる。	
		10週	光合成(暗反応)		光合成(暗反応)について説明できる。	
		11週	C3植物, C4植物, CAM植物の光合成		C3植物, C4植物, CAM植物の光合成について説明できる。	
		12週	脂質代謝(β酸化, α酸化)		脂質代謝(β酸化, α酸化)について説明できる。	
		13週	脂質代謝(生合成)		脂質代謝(生合成)について説明できる。	
		14週	窒素化合物の代謝		窒素化合物の代謝について説明できる。	
		15週	タンパク質の代謝		タンパク質の代謝について説明できる。	
		16週				
評価割合						
	中間試験		定期試験	課題レポート	合計	
総合評価割合	40		40	20	100	
基礎的能力	30		30	10	70	
専門的能力	10		10	10	30	

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	分子生物学	
科目基礎情報							
科目番号	0032			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	創造工学科（応用化学・生物系共通科目）			対象学年	4		
開設期	後期			週時間数	2		
教科書/教材	H.R. Horton他著 鈴木統一他監訳 「ホートン 生化学 第5版」 東京化学同人／参考書：田村隆明監訳 「分子生物学 ゲノミクスとプロテオミクス」 東京化学同人, 大山隆他著「エビジェネティクス」 裳華房						
担当教員	宇津野 国治						
到達目標							
遺伝情報の流れを説明することができる。 内容を分かりやすく発表することができる。 発表に対して的確な質問をすることができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)		
遺伝情報の流れを説明することができる。	遺伝情報の流れを説明することができる。		遺伝情報の流れを概ね説明することができる。		遺伝情報の流れを説明することができない。		
内容を分かりやすく発表することができる。	内容を分かりやすく発表することができる。		内容を発表することができる。		内容を発表することができない。		
発表に対して的確な質問をすることができる。	発表に対して的確な質問をすることができる。		発表に対して質問をすることができる。		発表に対して質問をすることができない。		
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	タンパク質が作られるまでの遺伝情報の流れを学ぶことによって、生体反応のメカニズムを理解するための基礎知識を身に付けることを目指す。						
授業の進め方・方法	授業は、教員による説明のほかにグループワークや発表を行う。発表日以外は、毎回、小テストを実施する。また、個人発表に対して全員が質問をする。授業の最後に授業のまとめを作成し、理解度を確認する。この科目は学修単位科目のため、授業を受ける前に4時間以上の自学自習が必要であり、毎回レポートを提出してもらう。成績評価は、中間試験30％、定期試験40％、小テスト15％、質問5％、発表5％、授業のまとめ5％である。合格点は60点以上とする。再試験は中間・定期試験分の70％とする。						
注意点	正当な理由なく発表を行わなかった場合や課題を提出しなかった場合には最終評価を60点未満とする。授業態度が悪い者や小テストの平均点が40点未満の者、質問回数が少ない者には原則として再試験を実施しない。正当な理由がなく欠席した場合（理由を証明できない場合も含む）には、その回の小テスト、質問および授業のまとめの点数は0点となる。不正行為を行った場合には成績評価を0点とする。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	核酸 （教科書 pp.485～495）		ヌクレオチドの構造を説明できる。DNAの二重らせん構造、塩基の相補的結合を説明できる。		
		2週	転写 （教科書 pp.535～546, 553～559）		RNAの種類と働きを列記できる。転写の過程について説明することができる。		
		3週	転写 （発表）		転写に関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
		4週	翻訳 （教科書 pp.561～569）		コドンについて説明でき、翻訳の概要を説明できる。		
		5週	翻訳 （発表）		タンパク質合成に関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
		6週	翻訳 （教科書 pp.569～577）		翻訳の過程について説明することができる。		
		7週	中間試験				
		8週	翻訳 （発表）		翻訳の過程に関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
	4thQ	9週	遺伝子発現制御 （教科書 pp.546～553）		遺伝子の発現制御について説明することができる。		
		10週	遺伝子発現制御 （発表）		遺伝子の発現制御に関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
		11週	染色体と遺伝子組換え （教科書 pp.497～506）		染色体の構造と遺伝子組換えを説明することができる。		
		12週	染色体と遺伝子組換え （発表）		染色体や遺伝子組換えに関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
		13週	DNA複製 （教科書 pp.509～521）		DNAの半保存的複製を説明できる。		
		14週	DNA複製 （発表）		複製に関する問題を解くことができ、それをパワーポイントを用いて発表することができる。また、発表に対して質問をすることができる。		
		15週	まとめ		これまで学んだことを関連付けて理解することができる。		
		16週	定期試験				
評価割合							
	試験	小テスト	質問	発表	授業のまとめ	合計	

総合評価割合	70	15	5	5	5	100
基礎的能力	30	15	0	0	0	45
専門的能力	40	0	5	5	0	50
分野横断的能力	0	0	0	0	5	5

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	化学工学Ⅱ	
科目基礎情報							
科目番号	0033			科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	4		
開設期	通年			週時間数	1		
教科書/教材	化学工学会監修 多田豊編「化学工学 (改訂第3版) -解説と演習-」朝倉書店 / Warren McCabe,“Unit Operations of Chemical Engineering (Mcgraw-Hill Chemical Engineering Series)”,Mcgraw-Hill,2004						
担当教員	佐藤 森						
到達目標							
1.円管内の定常流れの流速, 流量等を計算できる。 2.レイノルズ数を求め流動機構を判定できる。 3.ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の計算ができる。 4.伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。 5.熱交換器における熱的設計計算ができる。 6.単一蒸発管での熱収支, 物質収支計算ができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安			標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	円管内の定常流れの流速, 流量等の計算ができる。			円管内の定常流れの流速, 流量等の基本的な計算ができる。		円管内の定常流れの流速, 流量等の計算ができない。	
到達目標2	レイノルズ数を求め流動機構の判定ができる。			助言を得ながらレイノルズ数を求め流動機構の判定ができる。		助言を得てもレイノルズ数の算出や流動機構の判定ができない。	
到達目標3	ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の計算ができる。			ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の基本的な計算ができる。		ベルヌイの式を理解できず, エネルギー損失等の計算ができない。	
到達目標4	伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。			伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の基本的な計算ができる。		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができない。	
到達目標5	熱交換器における熱的設計計算ができる。			熱交換器における基本的な熱的設計計算ができる。		熱交換器における熱的設計計算ができない。	
到達目標6	単一蒸発管での熱収支, 物質収支計算ができる。			単一蒸発管での基本的な熱収支, 物質収支計算ができる。		単一蒸発管での熱収支, 物質収支計算ができない。	
学科の到達目標項目との関係							
教育方法等							
概要	化学工学は, 化学製造工程を効率よく経済的に行わせるための学問で, 主に製造工程に应用されている機器ならびに装置の操作, 設計, 製作及び運転が目標である。しかし, これらの知識を全て取得するには広く工学の基本的な学問が必要であるが, ここでは化学工学の基礎である流動および伝熱について初歩的な知識を教授する。化学工学演習, プロセス設計へと繋がる科目である。						
授業の進め方・方法	授業には関数電卓, 定規, グラフ用紙を用意すること。 この科目は学修単位科目のため, 事前・事後学習として授業項目毎に配布される演習課題に自学自習により取り組むこと。演習問題は添削後, 目標が達成されていることを確認し, 返却する。目標が達成されていない場合には, 再提出を求めることがある。 授業項目と達成目標に関する内容の試験および演習で総合的に達成度を評価する。割合は定期試験40%, 中間試験40%, 演習20%とし合格点は60点である。						
注意点	自学自習時間とは, 日常の授業の予習復習時間, 理解を深めるための演習課題, および各試験準備のための時間を総合したものとする。 評価が60点未満の者に対して再試験を実施することがあるが, 課題提出や授業態度等が著しく不良な場合は受験を認めない。						
授業計画							
		週	授業内容		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	1.流動 1-1.流体の流れ		円管内の定常流れの流速, 流量等の計算ができる。レイノルズ数を求め流動機構の判定ができる。		
		2週	1.流動 1-2.ベルヌイの式		ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の計算ができる。		
		3週	1.流動 1-3.管内のエネルギー損失(1)		ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の計算ができる。		
		4週	1.流動 1-3.管内のエネルギー損失(2)		ベルヌイの式を理解し, エネルギー損失等の計算ができる。		
		5週	1.流動 1-4.流速, 流量の測定		円管内の定常流れの流速, 流量等の計算ができる。		
		6週	2.伝熱 2-1.伝熱の基本機構		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。		
		7週	2.伝熱 2-2.伝導伝熱		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。		
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	2.伝熱 2-3.対流伝熱(1)		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。		
		10週	2.伝熱 2-3.対流伝熱(2)		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。		
		11週	2.伝熱 2-4.輻射伝熱		伝熱機構を理解し, 伝導伝熱, 対流伝熱, 輻射伝熱での伝熱量等の計算ができる。		
		12週	2.伝熱 2-5.熱交換器(1)		熱交換器における熱的設計計算ができる。		
		13週	2.伝熱 2-5.熱交換器(2)		熱交換器における熱的設計計算ができる。		

後期		14週	3.蒸発 3-1.沸点上昇	単一蒸発管での熱収支，物質収支計算ができる。
		15週	3.蒸発 3-2.物質収支，熱収支	単一蒸発管での熱収支，物質収支計算ができる。
		16週	定期試験	
	3rdQ	1週		
		2週		
		3週		
		4週		
		5週		
		6週		
		7週		
		8週		
	4thQ	9週		
		10週		
		11週		
		12週		
		13週		
		14週		
		15週		
		16週		
評価割合				
		試験	演習	合計
総合評価割合		80	20	100
基礎的能力		0	0	0
専門的能力		80	20	100

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	情報処理 I
科目基礎情報						
科目番号	0034			科目区分	専門 / 必修	
授業形態	実験・実習			単位の種別と単位数	履修単位: 1	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	4	
開設期	通年			週時間数	1	
教科書/教材	朝井淳「3ステップでしっかり学ぶVisual Basic入門[改定2版]」技術評論社 / 高橋広樹「かんたん Visual Basic[改定2版]」技術評論社					
担当教員	佐藤 森					
到達目標						
1. 情報リテラシーについて説明できる 2. Visual Basicを用いて要求された処理に対するプログラムを作成できる 3. 表計算ソフトを用いて様々な処理ができる 4. プレゼンテーションソフトを活用して自らの考えを相手に伝えることができる						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	情報リテラシーを理解し、必要な事項を実践できる		情報リテラシーの基本的な内容を説明できる		情報リテラシーの基本的な内容を説明できない	
到達目標2	Visual Basicを用いて要求された処理に対するプログラムを作成し、これを自ら改良できる		Visual Basicを用いて要求された処理に対するプログラムを作成できる		Visual Basicを用いて要求された処理に対するプログラムを作成できない	
到達目標3	表計算ソフトを用いて様々な処理ができる		表計算ソフトを用いて基本的な処理ができる		表計算ソフトを用いて基本的な処理ができない	
到達目標4	プレゼンテーションソフトを効果的に活用して自らの考えを相手に明確に伝えることができる		プレゼンテーションソフトを活用して自らの考えを相手に伝えることができる		プレゼンテーションソフトを活用して自らの考えを相手に伝えることができない	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	化学技術者には、既存のアプリケーションソフト活用はもとより、自ら問題解決用プログラムを作成することが求められることも多い。本講義では主に「Visual Basic 2017」を用いたコンピュータプログラミングの基礎、および「EXCEL」を用いた表計算の基礎を教授する。					
授業の進め方・方法	講義は教室で説明の後、CAI室で行う。授業には補助教材を綴じるファイルを用意すること。成績評価は評価割合（定期試験40% 中間試験30% 課題30%）に従って行い学年評価とする。評価点が60点未満の場合、授業態度および課題提出状況が良好な者に対して再試験を行うことがある。					
注意点	授業項目毎に配布される演習課題に自学自習により取り組むこと。演習問題は添削後、目標が達成されていることを確認し、返却する。目標が達成されていない場合には、再提出を求めることがある。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週				
		2週				
		3週				
		4週				
		5週				
		6週				
		7週				
		8週				
	2ndQ	9週				
		10週				
		11週				
		12週				
		13週				
		14週				
		15週				
		16週				
後期	3rdQ	1週	コンピュータハードウェアの基礎		基本的なコンピュータハードウェア構成について説明できる	
		2週	情報リテラシー		情報セキュリティの考え方、個人情報とプライバシー保護について理解している	
		3週	Visual Basic 2017：変数と定数		データ型を理解し、基礎的な演算ができる	
		4週	Visual Basic 2017：流れ制御文		Visual Basic プログラムの基本構造を理解し、簡単なプログラムを作成できる	
		5週	Visual Basic 2017：繰り返し構文(1)		For構文を用いた「繰り返し」プログラムを作成できる	
		6週	Visual Basic 2017：繰り返し構文(2)		前判定構文を用いた「繰り返し処理」プログラムを作成できる	
		7週	Visual Basic 2017：条件分岐構文(1)		If構文の構成を理解し、簡単な条件分岐プログラムが作成できる	
		8週	Visual Basic 2017：条件分岐構文(2)		Else If 構文を用いて複数の条件分岐を要するプログラムを作成できる	
	4thQ	9週	中間試験		前期第8週までの内容を理解している。まとめのためのテストで合格点に到達できる	

	10週	PowerPoint : プレゼン	PowerPointを利用してプレゼン資料を作成できる
	11週	EXCEL : 表計算(1)	EXCELを利用した基本的な表計算ができる
	12週	EXCEL : 表計算(2)	EXCELを利用した基本的な表計算ができる
	13週	Visual Basic 2017 : モンテカルロ法	モンテカルロ法のアルゴリズムを理解し, 簡単な問題解決プログラムを作成できる
	14週	Visual Basic 2017 : 二分法	二分法のアルゴリズムを理解し, 実数解を有する任意の方程式について解を求めるプログラムを作成できる
	15週	Visual Basic 2017 : ニュートン法	ニュートン法のアルゴリズムを理解し, 実数解を有する任意の方程式について解を求めるプログラムを作成できる
	16週	定期試験	

評価割合				
	定期試験	中間試験	課題	合計
総合評価割合	40	30	30	100
基礎的能力	20	15	15	50
専門的能力	20	15	15	50

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	機能材料 I
科目基礎情報						
科目番号	0035		科目区分		専門 / 必修	
授業形態	授業		単位の種別と単位数		学修単位: 2	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年		4	
開設期	後期		週時間数		2	
教科書/教材	西村 淳, 樋口弘行, 大和武彦 共著, 「有機合成化学入門 – 基礎を理解して実践に備える」丸善株式会社／K. P. C. Vollhardt 他著, 古賀憲司他監訳「ボルハルト・ショアー現代有機化学 (上・下)」 (第3版) 化学同人, 吉原正邦他著「有機化学演習」三共出版, 稲本直樹著「反応論による有機化学」実教出版株式会社, J. McMarry 著, 伊東他訳「マクマリー有機化学 (上・中・下) (第3版)」東京化学同人, R. T. Morrison, R. N. Boyd 著, 中西他訳「モリソン・ボイド有機化学 (上・中・下) (第6版)」東京化学同人, 鈴木仁美著, 梅澤喜夫・大野公一・竹内敬人編, 「化学入門コース5 有機合成化学」岩波書店, その他有機化学関連の参考書					
担当教員	橋本 久穂					
到達目標						
有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できる. 反応のタイプと反応機構によって化合物と官能基とを関連づけ, 有機合成化学を包括的に理解して整理し, 簡単な化合物について反応経路の分析と設計を実行し, その技術を実践できる能力を身につける.						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安(優)		標準的な到達レベルの目安(良)		未到達レベルの目安(不可)	
到達目標1	有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できる.		有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について概ね例示できる.		有機合成という枠内で興味深く, かつ重要な化合物について例示できない.	
到達目標2	反応のタイプと反応機構によって化合物と官能基とを関連づけ, 有機合成化学を包括的に理解して整理できる.		反応のタイプと反応機構によって化合物と官能基とを関連づけ, 有機合成化学を包括的に理解して概ね整理できる.		反応のタイプと反応機構によって化合物と官能基とを関連づけ, 有機合成化学を包括的に理解して整理できない.	
到達目標3	簡単な化合物について反応経路の分析と設計を実行し, その技術を実践できる.		簡単な化合物について反応経路の分析と設計を実行し, その技術を概ね実践できる.		簡単な化合物について反応経路の分析と設計を実行し, その技術を実践できない.	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	この講義では, 有機化学の要点を復習したうえで, 逆合成の視点から天然物の全合成を概観し, さらに最近注目されている有機機能物質や構造的に興味深い有機化合物の合成について教授する.					
授業の進め方・方法	次回講義の授業項目をシラバスで確認して, 該当項目を教科書で予習すること. また, 授業項目毎に演習課題を出すので, それをもとに自学自習により取り組むこと. 演習課題は採点后, 返却する. 長期休業中にレポートの作成を求める. レポートは添削・採点后に返却する. 定期試験では, 達成目標に挙げた知識と能力が身につけていることを, 社会的に要求される水準 (国際的な水準) 以上の内容の問題の出題に十分に配慮した, 試験で達成度評価を行う. 学習目標に関する内容の定期試験, 中間試験, 上記の演習課題とレポートにより総合評価する (定期試験 60%, 中間試験 30%, 演習課題・レポート 10%). 合格点は 60 点である. 成績評価が 60 点未満の場合は再試験 (全授業項目を出題範囲とする) を実施することがある. ただし, 再試験の得点は上記の定期試験と中間試験の占める割合 (90%) までとし, 再試験を受けた者の成績評価は 60 点を超えないものとする.					
注意点	受講にあたってはノート, 筆記用具, 電卓・定規を準備すること. 自学自習時間として, 日常の授業のための予習復習時間, 理解を深めるための演習課題・レポート, および各試験の準備のための勉強時間を総合したものとする. 自学自習時間として60時間必要である.					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	有機材料化学とは		有機合成が何故必要か? 最近の有機機能材料を調査し, 説明できる.	
		2週	有機化合物の構造 (立体化学と分子の対称性)		構造有機化学, 特に立体化学について基礎的な問題を解ける.	
		3週	有機合成反応 (戦術) の要点, 合成計画 (戦略) の要点		有機合成の反応の要点と合成計画, それらを基にした合成スキームについて説明できる.	
		4週	合成スキームの最適化		有機合成の反応の要点と合成計画, それらを基にした合成スキームについて説明できる.	
		5週	骨格合成 アルドール縮合とClaisen 縮合のパターン		有機化合物の炭素-炭素結合の形成に有用な反応を例を挙げて説明できる.	
		6週	Michael 反応とGrignard 反応のパターン		有機化合物の炭素-炭素結合の形成に有用な反応を例を挙げて説明できる.	
		7週	炭素-炭素二重結合, 遷移金属接触カップリング反応		有機化合物の炭素-炭素結合の形成に有用な反応を例を挙げて説明できる.	
		8週	特徴的な構造をつくる炭素-炭素結合形成反応, 転位反応		有機化合物の炭素-炭素結合の形成に有用な反応を例を挙げて説明できる.	
	4thQ	9週	官能基変換・形成 置換反応		標的化合物のもつ官能基を整えるために既存の官能基の変換を置換反応, 付加反応, 酸化と還元に分類して理解できる. 主要な官能基の導入法を列挙できる.	
		10週	酸化反応と還元反応		標的化合物のもつ官能基を整えるために既存の官能基の変換を置換反応, 付加反応, 酸化と還元に分類して理解できる. 主要な官能基の導入法を列挙できる.	
		11週	炭素-炭素二重結合の変換		標的化合物のもつ官能基を整えるために既存の官能基の変換を置換反応, 付加反応, 酸化と還元に分類して理解できる. 主要な官能基の導入法を列挙できる.	
		12週	天然物 エピアンドロステロン		医薬品の製造と関係が深い天然物の合成, 現在社会を支える有機機能物質関連の合成を概観し, この考え方を他の有機化合物へ応用できる.	
		13週	(-)-アクトミン, ミクロコッシンP1, ビタミンB12		医薬品の製造と関係が深い天然物の合成, 現在社会を支える有機機能物質関連の合成を概観し, この考え方を他の有機化合物へ応用できる.	

	14週	有機機能物質 特徴的な芳香族化合物，オリゴチオフェン，ポルフィリン，フタロシアニン	有機機能物質についてその例を挙げ，物性との関連について説明できる．
	15週	興味深い構造の有機化合物 シクロファン，フラーレン（C60）誘導体 まとめ	代表的な化合物について，官能基の導入方法・変換方法を説明できる．これを利用して多様な有機分子の合成戦略と分子設計ができる．
	16週		

評価割合				
	中間試験	定期試験	課題・レポート	合計
総合評価割合	30	60	10	100
基礎的能力	0	0	0	0
専門的能力	30	60	10	100

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	機能材料実験
科目基礎情報						
科目番号	0036		科目区分	専門 / 必修		
授業形態	実験・実習		単位の種別と単位数	履修単位: 6		
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	4		
開設期	通年		週時間数	6		
教科書/教材	自作テキスト, 化学同人編集部編「正・続 実験を安全に行うために」(化学同人), 泉 他監修「化学レポートと論文の書き方」(化学同人)/化学工学会編:「新版化学工学－解説と演習」(槇書店), Warren McCabe, "Unit Operations of Chemical Engineering (Mcgraw-Hill Chemical Engineering Series)", Mcgraw-Hill, 2004.					
担当教員	櫻村 奈生,甲野 裕之,橋本 久穂,藤田 彩華,古崎 毅					
到達目標						
1. 分析に必要な操作が正しく行える。 2. 吸光光度法で得られたデータを用いて定量, 平衡定数の算出ができる。 3. 基本的な高分子化合物を合成できる。 4. 懸濁重合と乳化重合を実施し, 生成するポリマー性状の違いを確認できる。 5. 合成したポリマーの分子量を粘度法で計測し, 算出することができる。 6. モノマーとポリマーのH-NMRスペクトルを説明できる。 7. 感光性樹脂を合成し, その機能の発現を確認できる。 8. 液晶分子を合成し, DSC測定から液晶状態を確認できる。 9. 焼結体・ガラスを作製し, 機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。 10. 化学工学の各テーマにおいて, 実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。						
ルーブリック						
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安	
到達目標1	分析に必要な操作が正しく行える。		分析に必要な操作を助言を得ながら正しく行える。		助言を得ても分析に必要な操作を行えない。	
到達目標2	吸光光度法で得られたデータを用いて定量, 平衡定数の算出ができる。		吸光光度法で得られたデータを用いて助言を得ながら定量, 平衡定数の算出ができる。		助言を得ても吸光光度法で得られたデータを用いて定量, 平衡定数の算出ができない。	
到達目標3	基本的な高分子化合物を合成できる。		基本的な高分子化合物を助言を得ながら合成できる。		助言を得ても基本的な高分子化合物を合成できない。	
到達目標4	懸濁重合と乳化重合を実施し, 生成するポリマー性状の違いを確認できる。		懸濁重合と乳化重合を実施し, 生成するポリマー性状の違いを助言を得ながら確認できる。		懸濁重合と乳化重合を実施し, 生成するポリマー性状の違いを助言を得ても確認できない。	
到達目標5	合成したポリマーの分子量を粘度法で計測し, 算出することができる。		合成したポリマーの分子量を助言を得ながら粘度法で計測し, 算出することができる。		合成したポリマーの分子量を助言を得ても粘度法で計測し, 算出することができない。	
到達目標6	モノマーとポリマーのH-NMRスペクトルを説明できる。		モノマーとポリマーのH-NMRスペクトルを簡単に説明できる。		助言を得てもモノマーとポリマーのH-NMRスペクトルを説明できない。	
到達目標7	感光性樹脂を合成し, その機能の発現を確認できる。		助言を得ながら感光性樹脂を合成し, その機能の発現を確認できる。		助言を得ても感光性樹脂を合成し, その機能の発現を確認できない。	
到達目標8	液晶分子を合成し, DSC測定から液晶状態を確認できる。		助言を得ながら液晶分子を合成し, DSC測定から液晶状態を確認できる。		助言を得ても液晶分子を合成し, DSC測定から液晶状態を確認できない。	
到達目標9	焼結体・ガラスを作製し, 機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。		助言を得ながら焼結体・ガラスを作製し, 機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。		助言を得ても焼結体・ガラスを作製し, 機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できない。	
到達目標10	化学工学の各テーマにおいて, 実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。		化学工学の各テーマにおいて, 助言を得ながら実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。		化学工学の各テーマにおいて, 助言を得ても実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができない。	
学科の到達目標項目との関係						
教育方法等						
概要	材料(主に無機材料, 高分子材料)の「合成」・「物性評価」および「解析・分析」に必要な技術・知識を身に付けることを目的とする。化学工学系実験では, 単位操作を中心とした学問分野の知識と実地の製造運転・プラント管理に応用するために基本的な装置および機械を使用し, 理論と実測のデータとの評価と解釈に対する判断力を実践する。					
授業の進め方・方法	履修には次のものが必要である: 白衣, 保護メガネ, 手拭い, 上履き(運動靴), 実験ノート(ルーズリーフは不可。厚めのノートが良い), 電卓, 定規, テンプレート, グラフ用紙, 筆記用具。化学工学実験ではデータの整理にPCを用いることを可とする。 実験に関しては, 担当教員の説明をよく聞き, 安全に配慮して行うこと。 到達目標に関して実験レポートおよび実技により総合的に評価する。レポート70%・実技30%の割合で評価し, 四半期ごとに100点法で採点して平均する。 合格点は60点である。ただし, 正当な理由なく未提出のレポートがある場合には成績評価を60点未満とする。また, 他者のレポートを写したものは評価しない。					
注意点	外靴やサンダル履きでの実験は禁止とする。携帯電話の使用および装身具類着用は実験の支障となるので禁止する。また女子学生は動き易さと安全確保の点からパンツ等の方が良い。長い髪は必ずまとめておくこと。 自学自習時間は, 実験のための予習復習, 理解を深めるための課題演習およびレポート作成のために最低限必要とする時間を総合したのもとする。					
授業計画						
		週	授業内容		週ごとの到達目標	
前期	1stQ	1週	実験説明		実験に使用する器具・装置を理解できる。実験の方法・目的を理解できる。	
		2週	高分子材料-1 ポリマーの合成		高分子化合物を合成できる。	

		3週	高分子材料-2 酢酸ビニルの懸濁重合と乳化重合	懸濁重合と乳化重合を実施し、生成するポリマーの性状の違いを確認できる。	
		4週	高分子材料-3 共重合による橋かけポリスチレンの合成	高分子化合物を合成できる。	
		5週	高分子材料-4 橋かけポリスチレンのスルホン化とイオン交換容量の測定	イオン交換容量を測定し、算出することができる。	
		6週	高分子材料-5 ポリケイ皮酸ビニルの界面重合と光橋かけ	感光性樹脂を合成し、その機能の発現を確認できる。	
		7週	高分子材料-6 粘度法による分子量の測定	合成したポリマーの分子量を粘度法で計測し、算出することができる。	
		8週	レポート作成	理論・実験方法・実験結果を正しく記述できる。得られたデータについて考察し記述できる。	
		2ndQ	9週	実験説明	実験に使用する器具・装置を理解できる。実験の方法・目的を理解できる。
			10週	無機材料-1 液晶分子の合成とその特性評価	液晶分子を合成し、DSC測定から液晶状態を確認できる。
	11週		無機材料-2 BaTiO3焼結体の作製、誘電特性測定及び微細構造観察	焼結体・ガラスを作製し、機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。	
	12週		無機材料-3 ガラスの作製およびその熱膨張係数測定	焼結体・ガラスを作製し、機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。	
	13週		無機材料-4 無機化合物の熱分析	焼結体・ガラスを作製し、機器類を用いてそれらの有する誘電特性・熱膨張係数等を測定し評価できる。	
	14週		無機材料-5 Pb-Sn系状態図の作製	熱電対を用いてPb-Sn系合金の冷却曲線から状態図を作成し、その図の解釈が出来る。	
	15週		レポート作成	理論・実験方法・実験結果を正しく記述できる。得られたデータについて考察し記述できる。	
	16週				
	後期	3rdQ	1週	実験説明	実験に使用する器具・装置を理解できる。実験の方法・目的を理解できる。
			2週	分析化学-1 連続変化法による錯体の組織決定	低濃度試料の分析に必要な操作が正しく行える。
3週			分析化学-2 原子吸光光度法によるマグネシウムの定量	低濃度試料の分析に必要な操作が正しく行える。	
4週			分析化学-3 溶媒抽出法によるキレート試薬の分配係数および酸解離定数の測定	吸光光度法で得られたデータを用いて定量、平衡定数の算出ができる。	
5週			分析化学-4 8-キノリノールによるアルミニウムの定量 1 抽出吸光光度定量法	低濃度試料の分析に必要な操作が正しく行える。	
6週			分析化学-4 キノリノールによるアルミニウムの定量 2 臭素酸滴定	低濃度試料の分析に必要な操作が正しく行える。	
7週			レポート作成	理論・実験方法・実験結果を正しく記述できる。得られたデータについて考察し記述できる。	
8週			実験説明	実験に使用する器具・装置を理解できる。実験の方法・目的を理解できる。	
4thQ		9週	化学工学単位操作-1 ①円管内の対流熱伝達係数 ②粘度測定	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。	
		10週	報告会	自らの考えをまとめてプレゼンテーションできる。	
		11週	化学工学単位操作-2 ③恒圧ろ過 ④回分精留塔	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。	
		12週	化学工学単位操作-3 ⑤固体乾燥 ⑥管内の圧力損失	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。	
		13週	化学工学物性測定-1 ⑦粉体比表面積の測定 ⑧粒度分布測定	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。	
		14週	化学工学物性測定-2 ⑨品質管理 ⑩次元解析	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。	
		15週	レポート作成	理論・実験方法・実験結果を正しく記述できる。得られたデータについて考察し記述できる。	
		16週			
評価割合					
	レポート	実技	合計		
総合評価割合	70	30	100		
基礎的能力	0	0	0		
専門的能力	70	30	100		

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)		授業科目	応用微生物学		
科目基礎情報								
科目番号	0037			科目区分	専門 / 必修			
授業形態	授業			単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)			対象学年	4			
開設期	後期			週時間数	2			
教科書/教材	教科書：青木 健次著「基礎生物学テキストシリーズ4 微生物学」化学同人/参考図書：浜島 晃著「ニューステージ 新生物図表 生物基礎+生物対応」(株)浜島書店, MICROBIAL BIOTECHNOLOGY W.H.FREEMAN & COMPANY 1995							
担当教員	岩波 俊介							
到達目標								
MCCにおける V-E. 化学・生物系分野 1)農業・食品・環境・医療における微生物バイオテクノロジーの種類・概要・利点について説明できる。 2)微生物機能の応用プロセス及び各種産業分野における微生物機能を利用した基礎工学に関する問題を解くことができる。 3)微生物取扱い時の無菌操作・無菌環境の構築について説明できる。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安 (優)		標準的な到達レベルの目安 (良)		未到達レベルの目安 (不可)			
1)農業・食品・環境・医療における微生物バイオテクノロジーの種類・概要・利点について説明できる。	1)農業・食品・環境・医療における微生物バイオテクノロジーの種類・概要・利点について説明できる。		1)農業・食品・環境・医療における微生物バイオテクノロジーの種類・概要・利点の基礎的な内容について説明できる。		1)農業・食品・環境・医療における微生物バイオテクノロジーの種類・概要・利点について説明できない。			
2)微生物機能の応用プロセス及び各種産業分野における微生物機能を利用した基礎工学に関する問題を解くことができる。	2)微生物機能の応用プロセス及び各種産業分野における微生物機能を利用した基礎工学に関する問題を解くことができる。		2)微生物機能の応用プロセス及び各種産業分野における微生物機能を利用した基礎工学に関する基礎的な問題を解くことができる。		2)微生物機能の応用プロセス及び各種産業分野における微生物機能を利用した基礎工学に関する問題を解くことができない。			
3)微生物取扱い時の無菌操作・無菌環境の構築方法について説明できる。	3)微生物取扱い時の無菌操作・無菌環境の構築方法について説明できる。		3)微生物取扱い時の無菌操作・無菌環境の基礎的な構築方法について説明できる。		3)微生物取扱い時の無菌操作・無菌環境の構築方法について説明できない。			
学科の到達目標項目との関係								
教育方法等								
概要	微生物のヒトの生活との関わり合いは非常に深く、単純に見える構造の中にも高等生物と類似した点が多く存在しており、学術的にも、生活面に対しても大変有用性に富む生物である。そのもっとも典型的な例は、近年におけるバイオテクノロジーの発展である。微生物工学では、食品・環境・医療における微生物の応用と、その応用に至るプロセス及び各種産業分野におけるバイオテクノロジーを用いた先端技術について解説する。							
授業の進め方・方法	教科書その他、プリント、プロジェクト等を利用して講義する。講義時には、ノート、筆記用具、プリントを綴じるファイルを用意すること。割合は定期試験45%、テスト(中間まとめ)35%、課題レポート20%の割合で評価する。合格点は60点である。評価点が50点以上60点未満の場合に受講態度および「課題提出状況が」良好な者に対して再試験（試験分80%）を行うことがある。なお、再試験を受けた場合の評価は60点を超えないものとする。この科目は学修単位科目のため、事前・事後学習として課題レポートの提出を求めます。							
注意点	授業内容で様々な微生物の機能を理解するためには、充分な予習復習(自学自習)が必要である。本科目の単位修得には45時間以上の自学自習を必要とする。授業項目の理解を深めるために課題レポートを実施し、それをもって自学自習の評価の一部とする。							
授業計画								
後期	3rdQ	週	授業内容			週ごとの到達目標		
		1週	微生物バイオテクノロジーの範囲			バイオテクノロジーがどのような分野で利用されているのか理解できる。		
		2週	微生物機能の医療への利用			微生物を使った医薬品生産について理解できる。		
		3週	微生物機能の農業への利用			微生物機能の農業への利用について理解できる。		
		4週	発酵食品とは一味噌と醤油と納豆			伝統的発酵食品と微生物の関りについて理解できる。		
		5週	人類の歴史とパンー酵母の発酵現象			酵母の発酵現象が作り出す発酵パンについて理解できる。		
		6週	酵母菌、その他の微生物によるアルコール発酵			微生物によるアルコール発酵について理解できる。		
		7週	バイオマス資源からのエタノール生産			バイオマス資源からのエタノール生産について理解できる。		
	4thQ	8週	テスト(中間まとめ)					
		9週	アミノ酸発酵と代謝制御発酵			アミノ酸発酵と代謝制御発酵について理解できる。		
		10週	酢酸発酵, 乳酸発酵			酢酸発酵, 乳酸発酵について理解できる。		
		11週	核酸発酵(イノシン酸発酵)			核酸発酵(イノシン酸)について理解できる		
		12週	感染症と免疫システム			感染症と免疫システムの関係について理解できる。		
		13週	遺伝子治療とは			遺伝子治療の現状について理解できる。		
		14週	医療と抗生物質			抗生物質と感染症の関係について理解できる。		
		15週	MRSA(薬剤耐性菌)出現の分子メカニズム			薬剤耐性菌の性質について理解できる。		
16週								
評価割合								
	定期試験	テスト(中間まとめ)	課題レポート				合計	
総合評価割合	45	35	20	0	0	0	100	
基礎的能力	20	20	10	0	0	0	50	
専門的能力	25	15	10	0	0	0	50	
	0	0	0	0	0	0	0	

苫小牧工業高等専門学校		開講年度	平成31年度 (2019年度)	授業科目	食品・生物化学実験
科目基礎情報					
科目番号	0038		科目区分	専門 / 必修	
授業形態	実験・実習		単位の種別と単位数	履修単位: 6	
開設学科	創造工学科 (応用化学・生物系共通科目)		対象学年	4	
開設期	通年		週時間数	6	
教科書/教材	自作テキスト, 堀越弘毅ほか著「ビギナーのための微生物実験ラボガイド」(講談社) 化学工学会編:「新版化学工学－解説と演習」(槇書店), Warren McCabe, “Unit Operations of Chemical Engineering (Mcgraw-Hill Chemical Engineering Series)”, Mcgraw-Hill, 2004.				
担当教員	岩波 俊介, 宇津野 国治, 檉村 奈生, 佐藤 森, 清水 祐一, 平野 博人				
到達目標					
1) バイオ実験の特色と目的, 危険性と安全確保及び操作環境の確保などを理解できる。 2) バイオ実験で使用する基本的な器具及び装置の名称と使用目的を把握できる。 3) 培地の種類とその基本成分, 調製法と使用方法, 滅菌法及び菌の植菌法を理解し実践できる。 4) 各培地成分の役割, 微生物が生産する多糖類について理解できる。 5) 植物培養細胞の取り扱いについて理解し実践できる。 6) 微生物の分類, 及び取り扱いについて理解できる。 7) 微生物機能を利用した各種発酵(エタノール発酵, 乳酸発酵)について理解し実践できる。 8) セルロースエステル合成法の実践し, その用途について理解できる。 9) タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。 10) 酵素活性の測定の基礎技術を理解し実践できる。 11) 遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。 12) 化学工学の各テーマにおいて, 実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	バイオ実験の特色と目的, 危険性と安全確保及び操作環境の確保などを理解できる。		バイオ実験の特色と目的, 危険性と安全確保及び操作環境の確保などの基本を理解できる。		バイオ実験の特色と目的, 危険性と安全確保及び操作環境の確保などの基本を理解できない。
評価項目2	バイオ実験で使用する基本的な器具及び装置の名称と使用目的を把握できる。		バイオ実験で使用する基本的な器具及び装置の名称と使用目的の基本を把握できる。		バイオ実験で使用する基本的な器具及び装置の名称と使用目的を把握できない。
評価項目3	培地の種類とその基本成分, 調製法と使用方法, 滅菌法及び菌の植菌法を理解し実践できる。		培地の種類とその基本成分, 調製法と使用方法, 滅菌法及び菌の植菌法の基本を理解し実践できる。		培地の種類とその基本成分, 調製法と使用方法, 滅菌法及び菌の植菌法を理解できず, 実践できない。
評価項目4	各培地成分の役割, 微生物が生産する多糖類について理解できる。		各培地成分の役割, 微生物が生産する多糖類についての基本が理解できる。		各培地成分の役割, 微生物が生産する多糖類についての基本が理解できない。
評価項目5	植物培養細胞の取り扱いについて理解し実践できる。		植物培養細胞の取り扱いについての基本を理解し実践できる。		植物培養細胞の取り扱いの理解できず実践できない。
評価項目6	微生物の分類, 及び取り扱いについて理解できる。		微生物の分類, 及び取り扱いについての基本を理解できる。		微生物の分類, 及び取り扱いについての基本を理解できない。
評価項目7	微生物機能を利用した各種発酵(エタノール発酵, 乳酸発酵)について理解し実践できる。		微生物機能を利用した各種発酵(エタノール発酵, 乳酸発酵)についての基本を理解し実践できる。		微生物機能を利用した各種発酵(エタノール発酵, 乳酸発酵)についての基本を理解できず実践できない。
評価項目8	セルロースエステル合成法の実践し, その用途について理解できる。		セルロースエステル合成法の基本的操作を実践し, その用途について理解できる。		セルロースエステル合成法の基本的操作を実践できず, その用途について理解できない。
評価項目9	タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。		タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いの基本について理解し実践できる。		タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いの基本について理解できず実践できない。
評価項目10	酵素活性の測定の基礎技術を理解し実践できる。		酵素活性の測定の基礎技術の基本を理解し実践できる。		酵素活性の測定の基礎技術の基本を理解できず実践できない。
評価項目11	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。		遺伝子組み換えの基礎技術の基本を理解し実践できる。		遺伝子組み換えの基礎技術の基本を理解できず実践できない。
評価項目12	化学工学の各テーマにおいて, 実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。		化学工学の各テーマにおいて, 助言を得ながら実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができる。		化学工学の各テーマにおいて, 助言を得ても実験の理論を理解し, 実験から得られたデータについて工学的に考察し記述, 説明ができない。
学科の到達目標項目との関係					
教育方法等					
概要	後期の7週目までは食品・生物化学実験, その後は化学工学実験を行う。 食品・生物化学実験では実験器具や装置の取扱い方法, 各種培地の調製法及び滅菌操作などの操作法をはじめ, 植物細胞, 微生物, 酵素などの生体試料の取扱いや大腸菌の遺伝子操作などを通してバイオ実験に必要な知識・技術を教授する。 化学工学系実験では, 単位操作を中心とした学問分野の知識と実地の製造運転・プラント管理に応用するために基本的な装置および機械を使用し, 理論と実測のデータとの評価と解釈に対する判断力を実践する。				
授業の進め方・方法	それぞれの実験テーマについて, 実験の意義・内容・結果の整理, 実験上の注意点などを説明した後に, グループに分かれて実験を行う。実験終了後は所定の書式で実験レポートの提出を求める。到達目標に関して, 実験レポートおよび実技(出席状況, 実験姿勢, 実験操作, 実験の記録など)により, 評価の観点に基づいて総合的に評価する。レポート70%, 実技30%の割合で評価する。合格点は60点以上である。ただし, 正当な理由なく未提出のレポートがある場合には成績評価を60点未満とする。また, 提出期限を過ぎてからの提出は減点とする場合がある。				

注意点		外靴，サンダル，スリッパ履きでの実験は禁止。また女子学生は動き易さと安全確保の点からパンツ等の方がよい。長い髪は必ずまとめておくこと。履修の際には次のものが必要である：白衣，手拭い，上履き(運動靴)，実験ノート(ルーズリーフ不可)，電卓，定規，テンプレート，グラフ用紙，色鉛筆，筆記用具，油性マジックインキ(ガラス器具に印等を付けるため)。必ず予習をし，プロトコールを作成してくること。実験中は途中の観察等も必ずノートに記録すること。実験中は真摯な態度でのぞみ，ふざけたりしないこと。		
授業計画				
		週	授業内容	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	食品・生物化学実験の概要説明（実験上の注意）	バイオ実験の特色と目的，危険性と安全確保及び操作環境の確保などを理解できる。
		2週	実験器具、装置の説明	バイオ実験で使用する基本的な器具及び装置の名称と使用目的を把握できる。
		3週	微生物セルロースの合成	培地の種類とその基本成分，調製法と使用方法，滅菌法及び菌の植菌法を理解し実践できる。各培地成分の役割，微生物が生産する多糖類について理解できる。
		4週	ニンジンカルスの個体再生	植物培養細胞の取り扱いについて理解し実践できる。
		5週	微生物の分類に関する実験	微生物の分類，及び取り扱いについて理解できる。
		6週	大腸菌の増殖の評価	微生物の分類，及び取り扱いについて理解できる。
		7週	身の回りの微生物に関する実験	微生物の分類，及び取り扱いについて理解できる。
		8週	固定化酵母を用いたエタノール発酵実験	微生物機能を利用した各種発酵(エタノール発酵，乳酸発酵)について理解し実践できる。
	2ndQ	9週	セルロース誘導体の合成（１）セルロース誘導体の種類およびその合成法に関する説明	セルロースエステルの合成法を実践し，その用途について理解できる。
		10週	セルロース誘導体の合成（２）セルロースアセートおよびセルロースキシランテートの合成	セルロースエステルの合成法を実践し，その用途について理解できる。
		11週	酵素実験（１）ジャガイモから酸性ホスファターゼを抽出・精製する実験の説明	タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。
		12週	酵素実験（２）酸性ホスファターゼの抽出	タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。
		13週	酵素実験（３）酸性ホスファターゼの精製	タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。
		14週	酵素実験（４）酸性ホスファターゼの諸性質	タンパク質・核酸の抽出・精製を通して生体高分子の取り扱いについて理解し実践できる。
		15週	酵素実験（５）酵素活性の測定	酵素活性の測定の基礎技術を理解し実践できる。
		16週		
後期	3rdQ	1週	大腸菌の形質転換実験（１）DNA実験安全講習会	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		2週	大腸菌の形質転換実験（２）実験概要の説明	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		3週	大腸菌の形質転換実験（３）形質転換実験	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		4週	大腸菌の形質転換実験（４）プラスミドDNAの調製と制限酵素処理	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		5週	大腸菌の形質転換実験（５）電気泳動、PCRの説明	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		6週	大腸菌の形質転換実験（６）電気泳動、PCR実験	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		7週	大腸菌の形質転換実験（７）データの整理、実験レポートの書き方について	遺伝子組み換えの基礎技術を理解し実践できる。
		8週	実験説明	実験に使用する器具・装置を理解できる。実験の方法・目的を理解できる。
	4thQ	9週	化学工学単位操作-1 ①円管内の対流熱伝達係数 ②ボイラーの性能	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。 自らの考えをまとめてプレゼンテーションできる。
		10週	報告会	自らの考えをまとめてプレゼンテーションできる。
		11週	化学工学単位操作-2 ③恒圧ろ過 ④回分精留塔	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。
		12週	化学工学単位操作-3 ⑤固体乾燥 ⑥管内の圧力損失	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。
		13週	化学工学物性測定-1 ⑦粉体比表面積の測定 ⑧粒度分布測定	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。
		14週	化学工学物性測定-2 ⑨品質管理 ⑩次元解析	実験の理論を理解し、正しいデータを得ることができる。
		15週	レポート作成	理論・実験方法・実験結果を正しく記述できる。得られたデータについて考察し記述できる。
		16週		
評価割合				
		レポート	実技	合計
総合評価割合		70	30	100
基礎的能力		0	0	0
専門的能力		70	30	100
分野横断的能力		0	0	0